

変身回数に限りがある
世界の魔法少女が

悪の手を取り
堕ちた先。

R18
Adult Only
成人向け作品
高校生閲覧不可

夢見町3丁目。



これは、彼女達の可能性のひとつの話。

この世界の
魔法少女には
期限がある

妖精との契約の際に与えられる
魔法少女として
変身することができる回数

それを使い切ると変身は不可となり
魔法少女に関する記憶も消える

このルールのために
かつて道を外れた
魔法少女が居た

残された魔法少女達は
彼女達を元に
戻す術を探したが

それは
見つからなかった

しかし…

その時は
突然訪れた

ぽち

私は……？

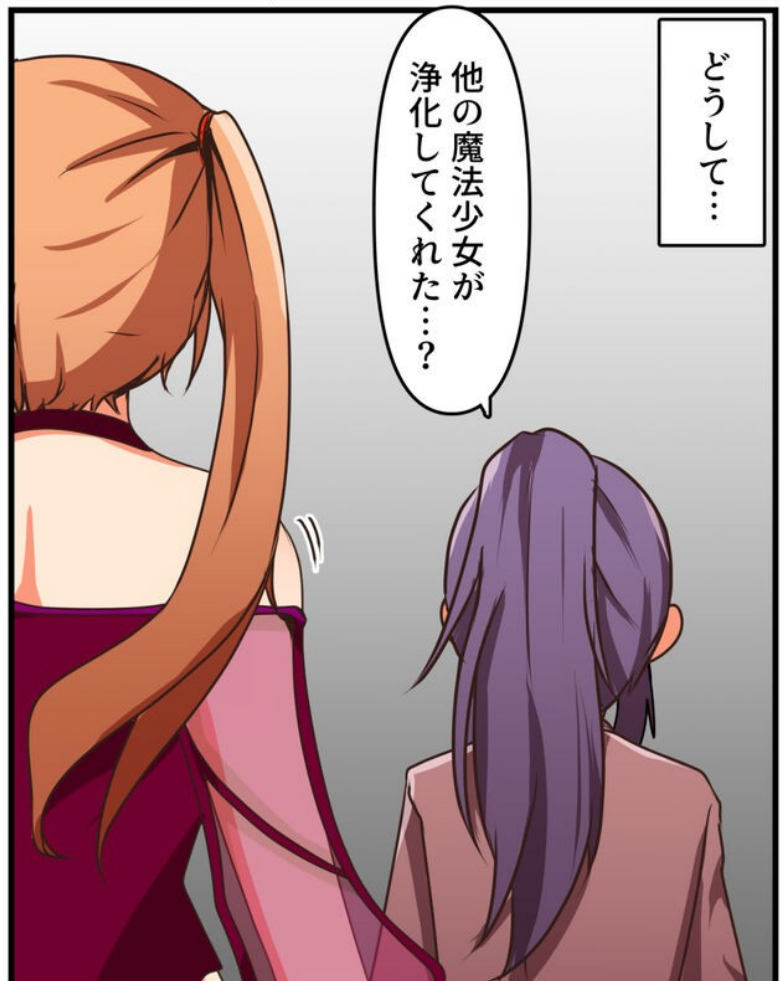
よろ……

……ここは……

うあ——っ!?

——うっ……

！
バクッ





かわいそう
せつかく私達
自由になったのに



魔法少女なんかに
浄化されるなんて



……つぼみ……

浄化……
やっぱり

……でも……
良かった……

記憶が
残っているなら

あと一度だけ

自由なんかじゃない

ごめんなさい

私はあなたを
縛った……



すう……
8

あなたを元に戻すために

変身できる





さよなら…!!

大好きだよ

ぱあぁあ..



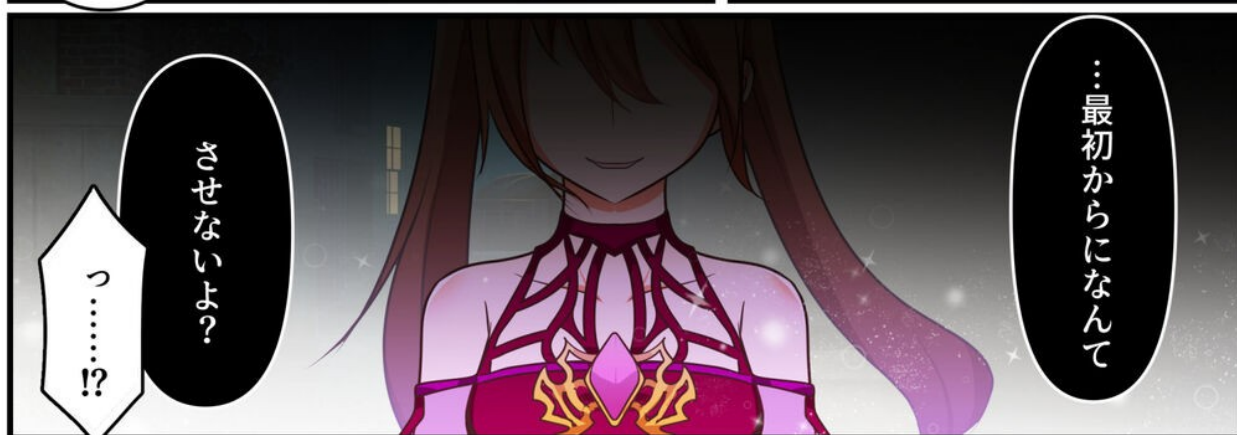
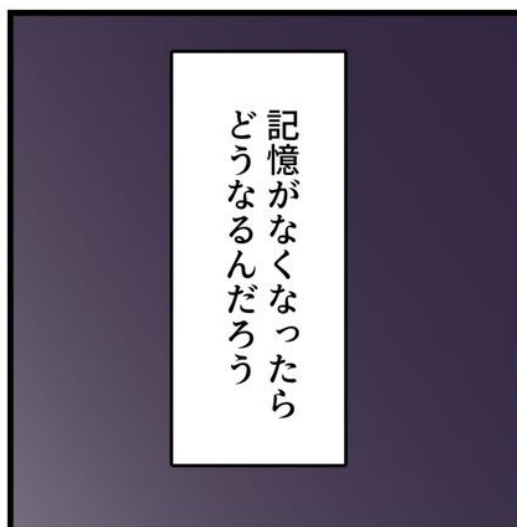
私自身の
残された力で

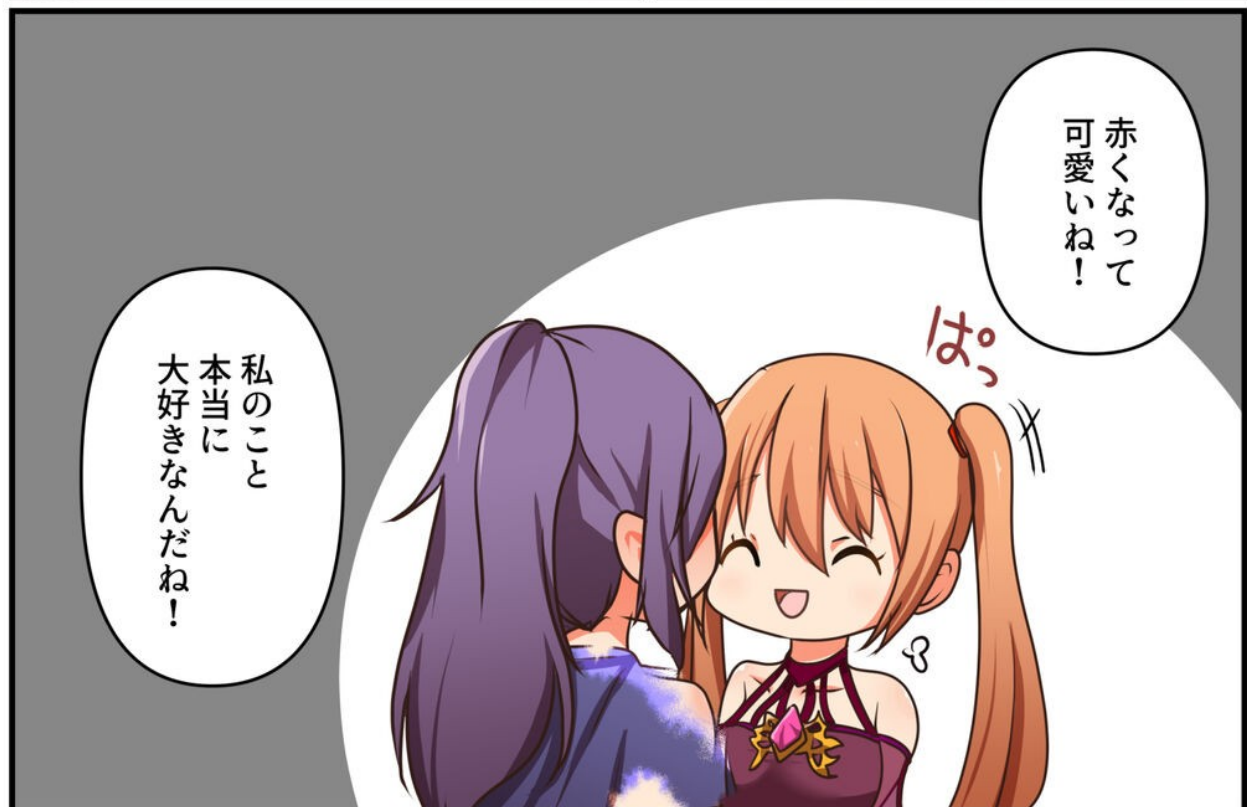
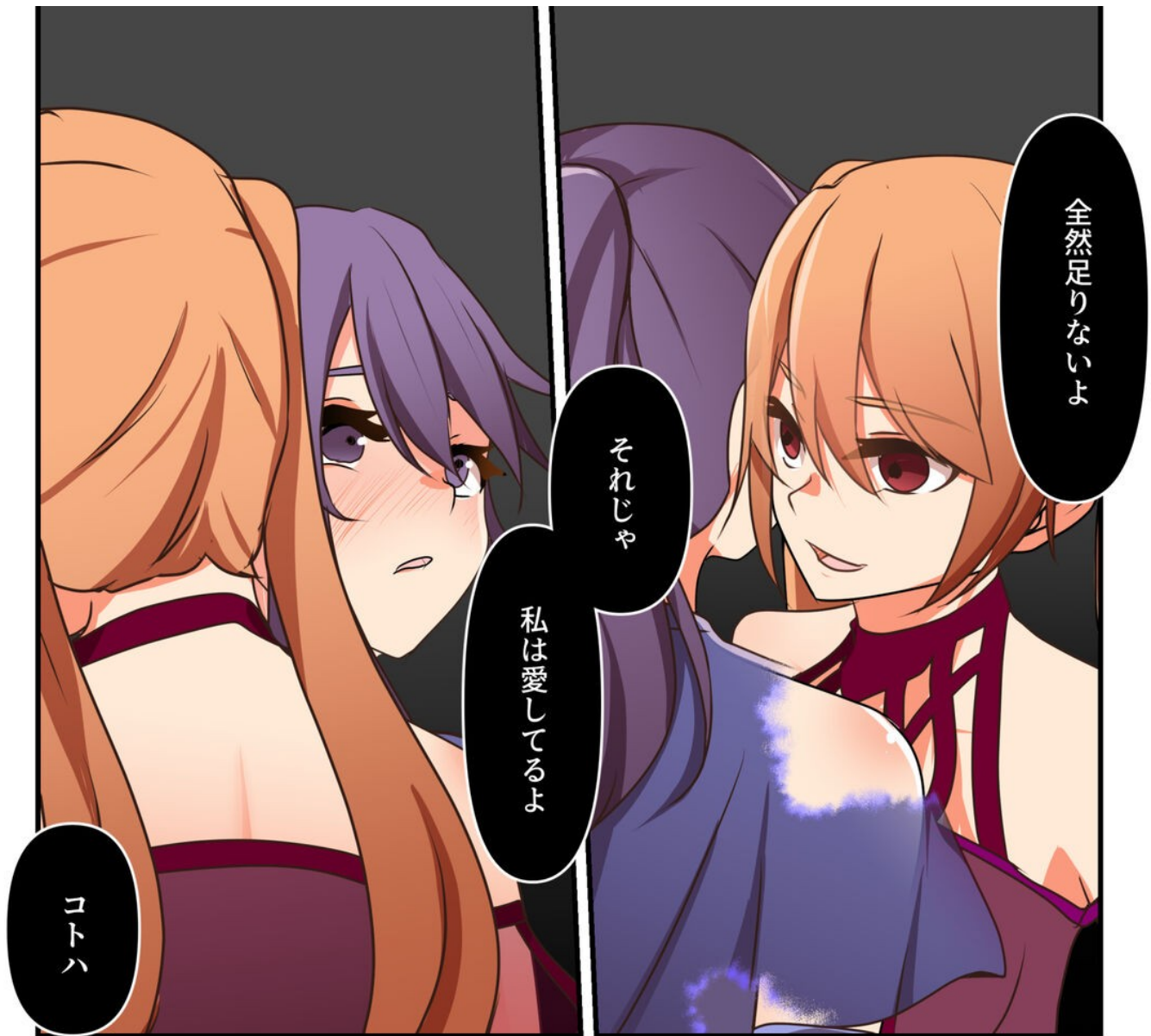
つぼみを
元に戻す

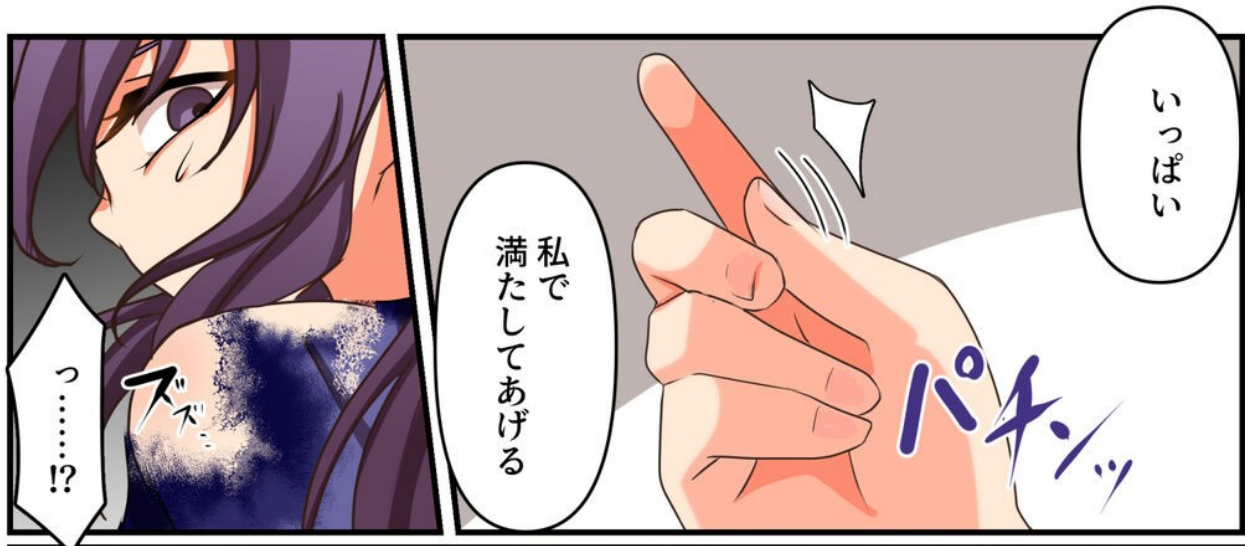
私
最後まで

勝手だったな







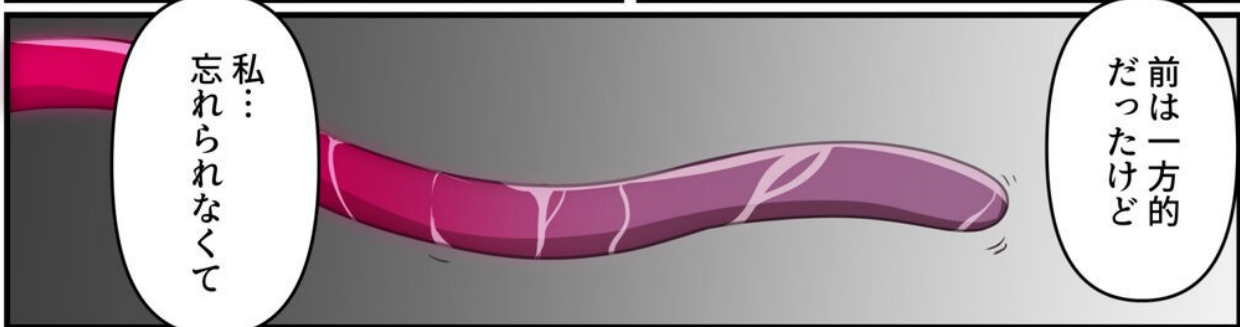




これも
コトハが
やったことと同じ



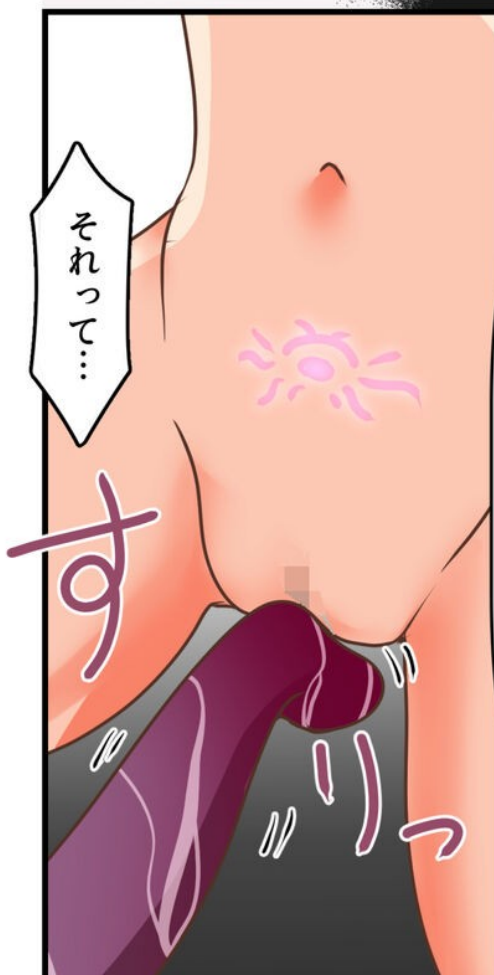
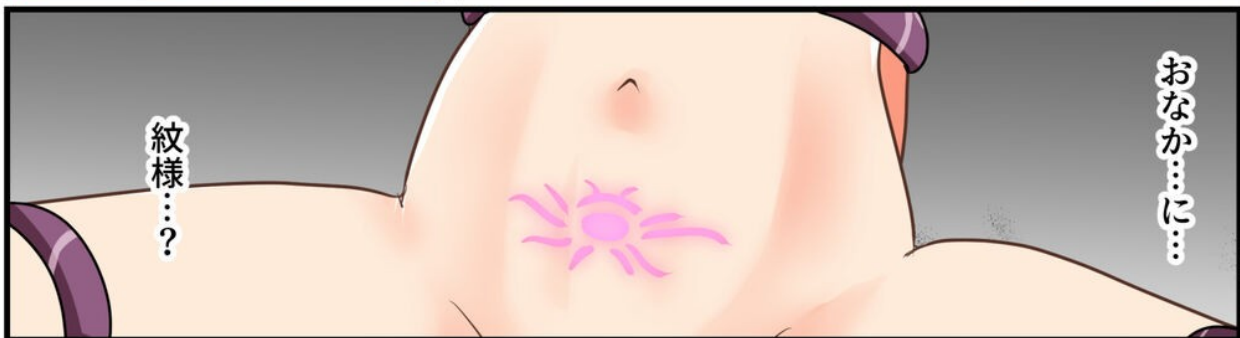
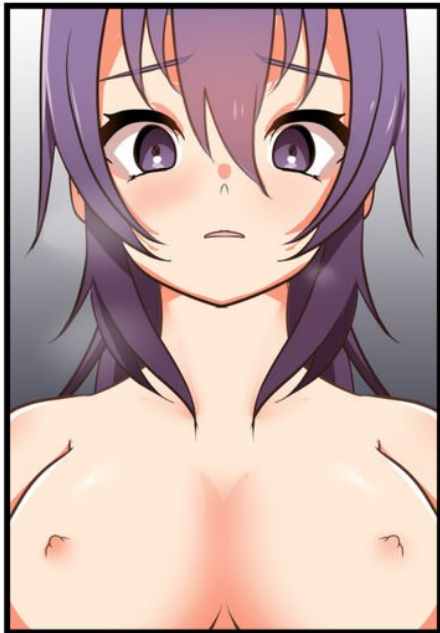
でもひとつね
これだけは
違うことをしようと思うの





つぼみが…
私の中に…



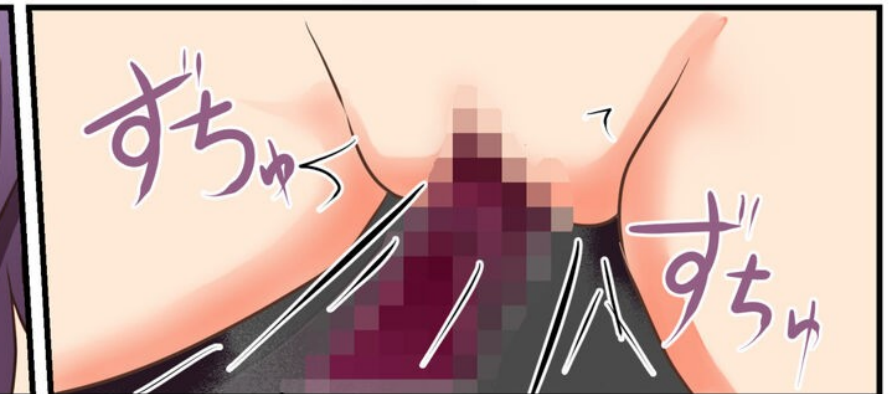
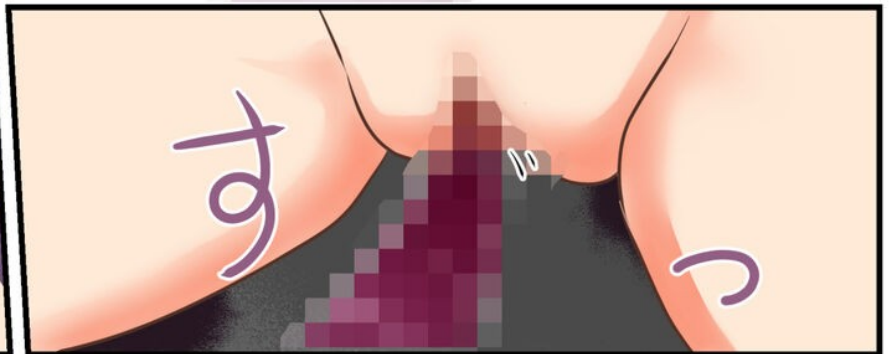
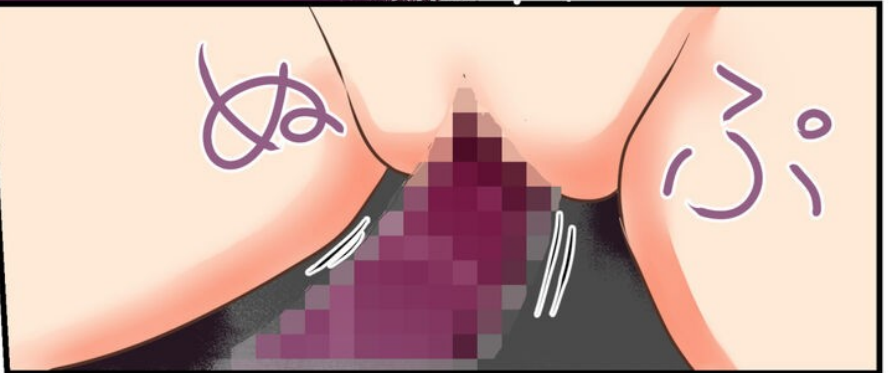


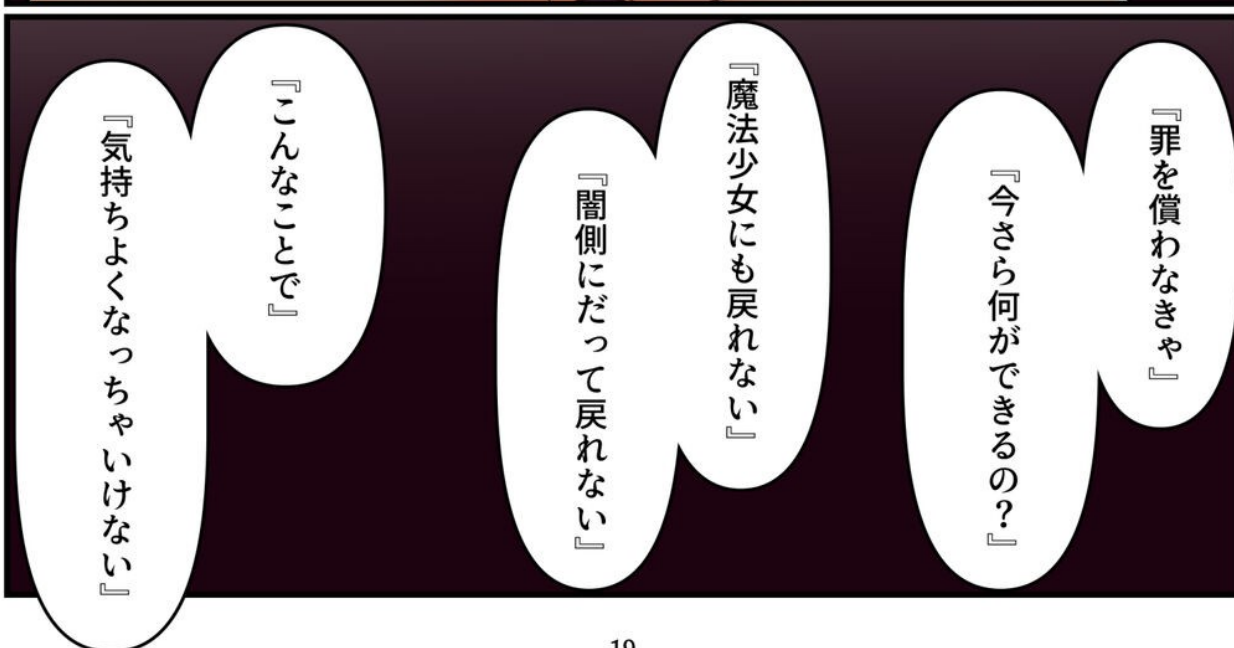


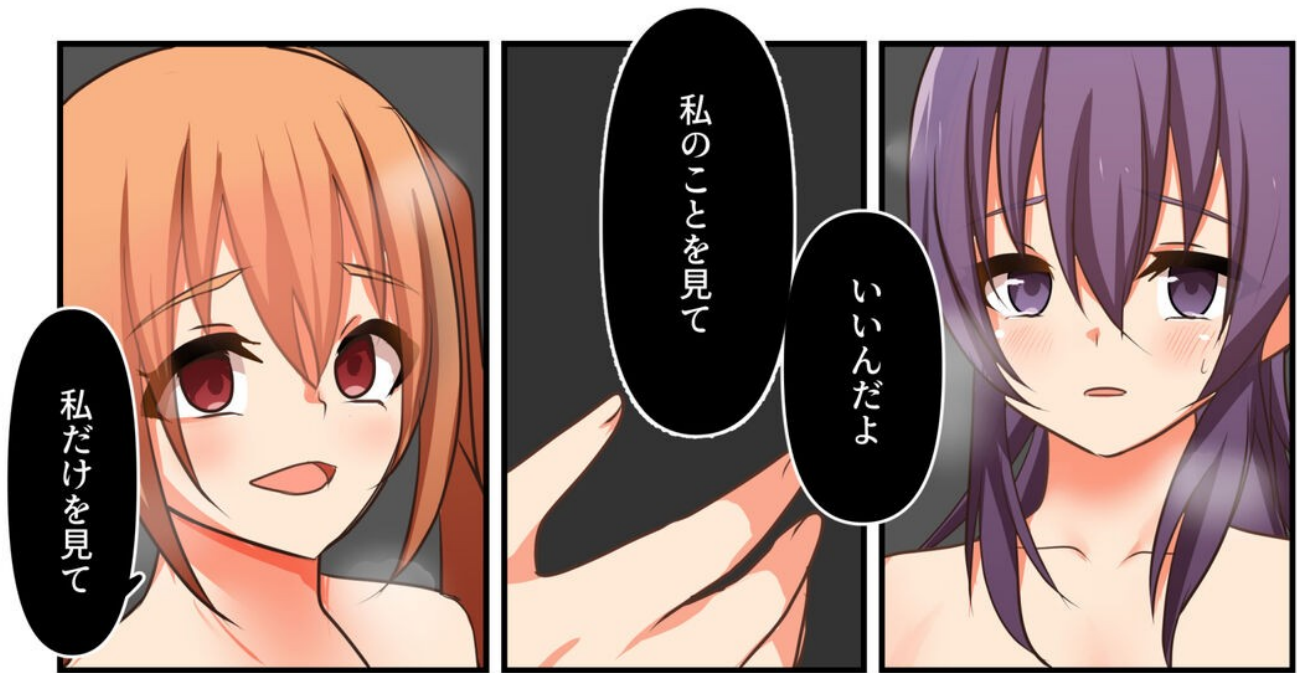
なぞられた…だけで…

さっきのより…

気持ちいい…!!?









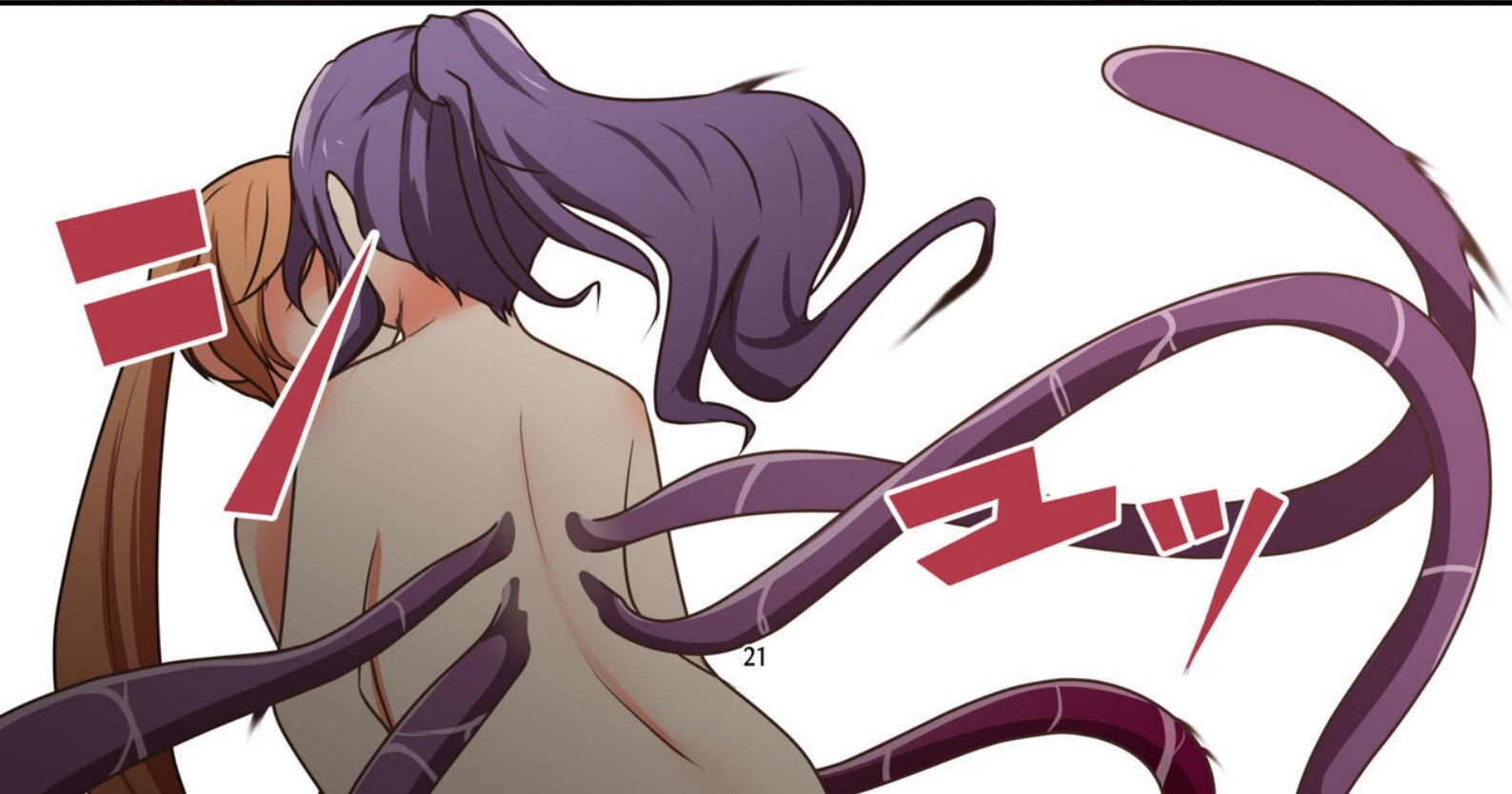
他人のことなんて

……今さら……！



どうだっていい……！

ニ イ ツ ……









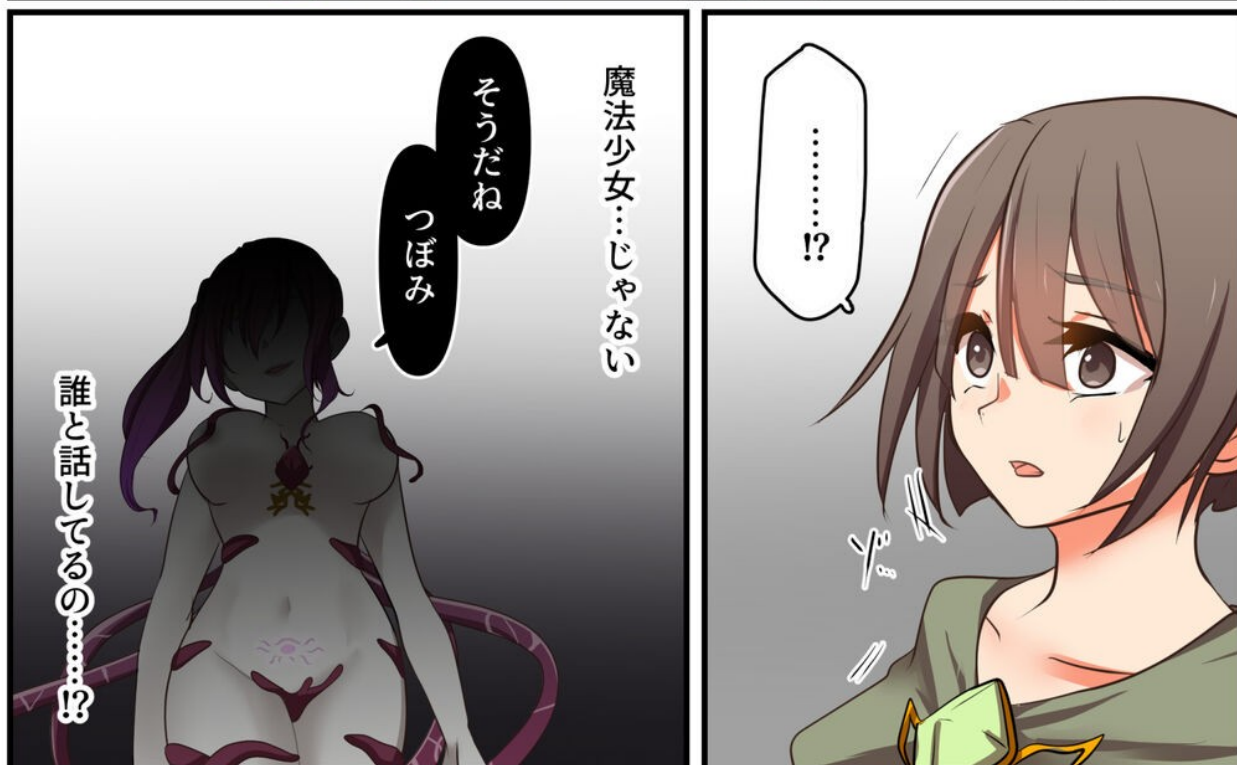
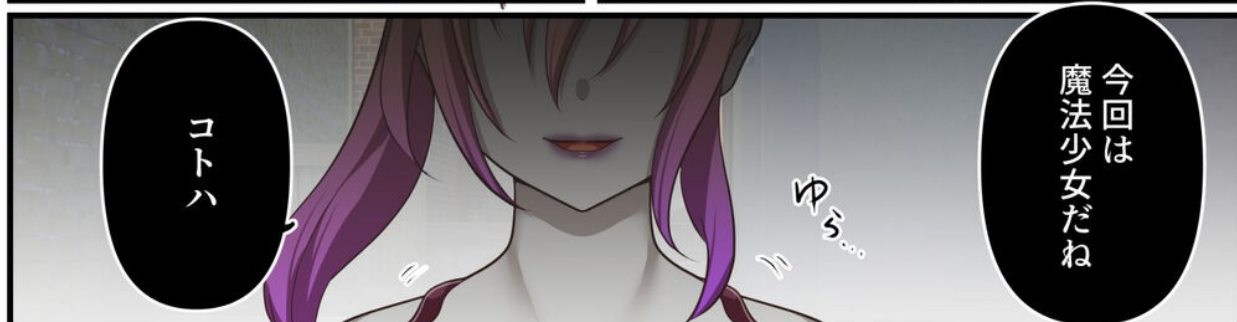
とある「元・魔法少女達」が
行方不明になってから数か月後

気付けば『闇』の勢力にも
彼女達の姿はなく

誰かが彼女達を
解放したのではないか
…そう思われていた

そしてある日—

何？
この不穏な気配…？







唐草つぼみ

前作の被害者であり元魔法少女。

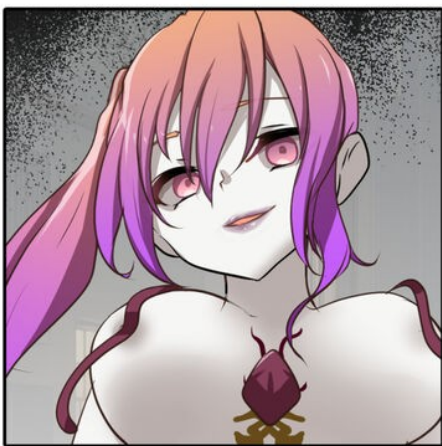
『闇』の勢力の罠にかかったコトハにより
コトハをただただ愛する存在になった。



蘇芳コトハ

魔法少女の記憶に関するルールへの悩みから、
一度『闇』の勢力の罠にかかりつぼみを陥れた。

多くの魔法少女と対峙したことで『闇』の
浄化が行われ、正気と力を取り戻した。



？ ？ ？

新しく出現した存在。

『闇』も『魔法少女』も自身を維持するための
食料として認識している。

目撃されるときは必ず1人でしか目撃されて
いないが、誰かと話していることが多いらしい。

『闇』の勢力

人の欲望を色々する悪い勢力。

妖精と契約した魔法少女は
『闇』を浄化するためにいつも
頑張っている。

妖精

かつて『闇』によって自分達の
世界を滅ぼされている。

『闇』の侵食が深かったコトハと
つぼみにはもう認識ができない。

次ページからは前回もゲスト原稿を依頼した友人、久慈らんちうさんに

「この魔法少女の世界の設定でIFの話を好きに書いてくれないか」
「コトハとつぼみ以外の魔法少女の話でもいい。全然いい。」

という割と無茶な願いをして書いていただいた小説です。
いつも無茶な願いを聞いてくれてありがとう…！

魔法少女達の別の可能性の話。
最後までお楽しみいただければ幸いです。



枝珊瑚に実をつけて

この世界の魔法少女には、期限がある。

妖精との契約の際に与えられる、魔法少女として変身できる回数。

それを使い切ると変身は不可となり、魔法少女に関する記憶も消える。

本来戦いに縁のなかったはずの少女たちの心を守るための措置。

そんな世界の、ある魔法少女たちのお話。

魔法少女の名は、五十嵐サナ・シャイニーロゴス。赤茶色のセミロングをハーフツインにしている、穏やかな雰囲気をもった印象の彼女。しかし、魔法少女としての使命を第一に考えており、強い理念をもつ少女である。

そしてその相棒の妖精は、エルル。大きな耳がとても特徴的。耳の下半分は立ちあがり、上半分から先にかけては軽く折れ曲がっている。エルルのチャームポイント。首元には少し彩度の低い緑のリボンが結ばれており、その下にはジャボというひらひらの襟のような飾りをつけている。

世界というには少し狭い、このあたりの地域の『闇』を一人で浄化していた。魔法少女は彼女だけではないが、あまり人数が多いわけでもなく……。このあたりの地域はサナとエルルが担当してきた。限られた変身回数をやりくりしながら、『闇』と戦う日々。大変なことも多いけれど、サナにはエルルが居たので、心が折れることはなかった。サナが『闇』のチカラに負けそうになるときは、エルルが必死にサポートをし、応援をして乗り越えた。また、エルルが自分の非力さを嘆けば、サナがそれを慰め励ましてきた。それはきっと、一心同体とも言える間柄。苦難を共にした二人の間には確かな絆が芽生えている。

そんな中、エルルは悩み、自分の非力さに嘆いていた。

エルルには『闇』と直接戦うチカラはない。実際に戦うのは彼女たち魔法少女。そうなれば必然と傷つくのも彼女たち魔法少女。

それを目の当たりにするたびに、エルルの心は痛んだ。とてつもない無力感に襲われてしまう。サナを魔法少女に変身させないで、『闇』と対抗する手段はないものか。つらい思いをさせず、痛い思いをさせず、魔法少女たちだけじゃなくて、自分たちも戦いに加わって……。

「……ル！ エルル!!」

「わっ！ トルル先輩……！ ど、どうしたエル？」

思考の渦にとらわれていたエルルに声をかけたのは、先輩妖精であるトルル。

「もしかしてまた、魔法少女たちのことを考えてたトル？」

さすがは先輩妖精。未熟なエルルの考えなど、簡単に見透かしているようだ。

あまり上手じゃない苦笑いをしながら、エルルは頬を掻く。

「ちょっとだけエル……。なにか、もっと、できることがあるはずなんだエル……。エルルたちが気付いてないだけで……」

悲痛な声色は、エルルの心境を現していた。トルルは眉尻を下げ、不安そうにエルルを見つめる。

エルルの言うことは分かるが、自分たち妖精は魔法少女たちに託すしかない。もっと他にやり方なんてあれば、魔法少女たちだけに負担を押し付けたりなどしないのである。

全てを分かったうえで、なおも悩む後輩妖精が、とても、心配になる。

『闇』は小さな心の隙間から、侵入し浸食してくるのだ。いまの不安定なエルルなど、格好の餌食でしかない。

短い手を伸ばして、エルルの頭を撫でる。エルルには心を強く持つていてほしい。魔法少女を不安にさせないで。傍にいてあげて。

「気持ちわかるトル。でも、エルルがそんな、なよなよしていたら『闇』に狙われるトルよ！」

——そうなれば、大変な目にあうのは魔法少女トル！

先輩妖精の叱咤激励に、目を丸くするエルル。

「そうエル……。しっかりしなきゃ……」

魔法少女を守りたいのに、危険にさらしてしまつては意味がない。『闇』には細心の注意を払わねばいけない。優しく撫でてくれるトルルの温もりを感じながら、目を閉じる。

サナの、傍にいたい。一緒に、これからも、ずっと……。彼女の笑顔を守っていきたい。

それは、エルルの確かな願い。確固たる信念。

胸に手を当て、サナの無垢な笑顔を思い出す。その温かさにつられて、小さく笑みをこぼす。目を開け、トルルを見つめた。トルルの眉尻はまだ下がったままである。

「ありがとエル」

エルルは、トルルの方へ手を伸ばし、両頬を引っ張った。ちょっとした憂さ晴らし。

「な、なにするトルカ〜!! 真面目に! 心配してるのに〜!!」

「わかってるエル〜! だから、ちゃんとお礼言ったエル〜!!」

そうやってお互い笑い合う。小さな妖精たちの小さな戯れ。

この一瞬のおかげで、エルルからまた『闇』は遠ざかっていく。

青々とした芝生。そのうえに横たわるのは、魔法少女シャイニーロゴス。息は荒く、ところどころケガもしている。痛々しい姿だ。

ここは川沿いの少し開けた公園。公園と言っても遊具の類はない、質素で閑散としている広場。普段なら子供たちの元気な声が響いているはずだが、いまは人っ子一人居なかった。

そんな静けさの中で、シャイニーロゴスを見下ろしていたのは、青紫色をしたスライム。ゲル状のモンスターである。

骨格を必要としない原始的なモンスターで、ころころと形を変えては、シャイニーロゴスたちを欺く。

さらに、厄介なことに物理攻撃が効かなかった。それならばと、魔法攻撃をしても、決まった形がないせいで、ぬるりと躲かれてしまっている。

敵に攻撃が届かない中、瀕死の状態のシャイニーロゴス。

「どうしましたか？ もう終わりです？」

少し高い女性の声。丁寧な言葉使いなのに、威圧的で、傷だらけの体には重く響く。

その声の主であるスライムを睨みつけ、シャイニーロゴスはゆっくりと起き上がった。とはいえ、体の動きは鈍く、肩を上下に動かしなんとか酸素を取り込む。

「あなたを倒さずに、終われるわけがないで……、しょ……」

——魔法少女、舐めないでよね。

体が上がる悲鳴など聞こえないとでも言いたげに、すこし強めの言葉を発する。それは敵に対する言葉だけではない。心折れそうな自分にも、言い聞かせるように。

口を少しだけ開けて、薄く長く、息を吐く。呼吸を落ち着かせて、改めて敵を見やる。

『シャイニーロゴス！ 聞こえるエルか！』

頭の中に妖精、エルルの声が響く。この特殊な会話方法は、魔法少女と妖精が使えるテレパシー会話。シャイニーロゴスは、少しだけ視線を逸らしてエルルを見た。それに気が付いたエルルは、頷きながらテレパシー会話を続ける。

『少しだけ敵の注意を引き付けてほしいエル！ その隙にエルルがあいつの傍でバリアを張るエル！』

予想もしなかった提案に、体に力が入る。

『そしたら一気に魔法を放つエル！ タイミングを合わせて、魔法だけ通れるようにバリアを解けば、逃げ場所なんかなくなるエル!!』

『エルル！ ダメ！ そんなの危険すぎる！ 私の魔法がエルルに当たっちゃうかもしれないんだよ!』

『でも他に方法がないエル……！ 網や縄じゃすり抜けられちゃうし、板とかで囲うと敵の位置が見えなくなっちゃうエル』

敵の位置を正確に把握していなければ、当たる攻撃も当たらない。と言いたいのだろう。だしかにその通りだ。その点、エルのバリアなら半透明で、敵の位置も把握しやすい。道具を準備して敵を捕まえる。なんていうまどろっこしいこともしなくて済む。ただ敵に近づき、その場でバリアを発動させればいい。工程が少なくて済むうえ、確実性が高い。エルは自分が使える能力の中で、この場を打開する最適解を提案していた。

シャイニーロゴスもそれは分かっている。わかっているが、即決できない。とても安全と言える作戦内容ではなかったからだ。頭が、思考が、そちらに囚われる。悲惨な思考に釣られて、視線が惑う。

スライムは、そのわずかな揺らぎを見逃さなかった。体を鞭のように伸ばし、野蛮なほど豪快に攻撃を仕掛ける。
「……ッ!!」

なんとかその攻撃に反応したシャイニーロゴスは、横へ、横へと逃げる。足をからめとられそうになりながらも、瞬時の判断で避けていく。

残像すら見えるほどの早い鞭の動き。

その攻撃に対応しながらも、思案する。なにか他の作戦を。安全で確実な――。

そうやって考えはするが、敵の攻撃の早さに邪魔され難儀する。だめだ。思いつかない。ぎゅっとつぐんだ唇は、白味を帯びている。かみしめた奥歯からは、ギリッと音がした。

たしかに火を見るよりも明らかだ。エルの作戦が、敵を倒すには間違いないことを。そんなこと、提案された時点で分かっていた。

縋るように、胸元にある宝石を強く握りしめる。

瞳には確固たる思いが宿り、強く自分を奮い立たせる。

私が、悲観的になってどうする！ シャイニーロゴス！ 『闇』からみんなを守りるために、魔法少女になったんで

しょ！

それなら……、それなら!!相棒の妖精も守れなくてどうするの! 鼓舞するように言い聞かせる。シャイニーロゴスは心を決めた。

『ごめん、エルル……! 大丈夫、エルルと私ならできるよね』

『だてに、シャイニーロゴスの戦いを間近で見てきたわけじゃないエル! いいタイミングで避けるから心配しないでほしいエル!』

『えへへ……! そうだよね! すこし、だけ、気弱になっちゃった……魔法少女なのに情けないなあ……!』

お互いに掛け合った言葉が心地よい。エルルの言葉が、シャイニーロゴスにチカラをもたらす。それは、エルルに對しても同じ。2人は独りじゃない。信じあうことで、想定以上の結果をもたらす。

敵は好都合なことに、シャイニーロゴスにしか注意を向けていなかった。少し離れたところにいるエルルなど、目の端にもとらえてはいない様子。

注意は自分の方に向けさたまま、敵の動きを止めたい。そうすれば、エルルがバリアを張って、敵を逃げられなくしてくれる。

シンプルに考える。だが、敵の動きをどう止めるか。問題はそこにあった。敵の、異様に早い攻撃。手数が多く、隙のない攻撃。

その中を掻いくぐりながら、一瞬の隙をどう誘ったものか。

辺りを見渡す。自分の位置を把握しつつ、攻撃を防いでくれそうなものを探した。しかしここは開けた公園。盾にできそうな遊具などは、ない。

——なんでもいい、攻撃を止めてくれそうなものは……!!

懸命に探した先にあったのは、巨大な橋台。

この公園は、川沿いということもあり大きな橋がかかっている。それを支えているのが、この橋台だ。これを利用するしかない。単純な考えかもしれない。でも、今できるのはこれくらいだ。

そう思いついたシャイニーロゴスは、すぐさま移動を開始する。気が付かれないよう。攻撃を捌きながら、後ろへ、横へ、と。

その動きに敵は気が付いていない。しかし、エルルは理解していた。先ほどの作戦を実行しようとしていることを。息をのみ見守るエルル。敵との距離を見誤らないようにして、自分も少しずつ移動を始めた。

『敵の動きが止まった隙を狙って!』

テレパシーでエルルに伝える。

『まかせてエル!』

幾度もの戦いの中で、培われた二人の阿吽の呼吸。

大きな大きな耳を揺らしながら、エルルも距離を測る。

それを遠目に見ながら、シャイニーロゴスは、確信を得る。私とエルルならやれると。その思いから少しだけ笑みがこぼれた。

「そんなに逃げてばかりでは、勝てなくてよ?」

敵は安易な挑発してくる。しかし、そんな言葉は効かない。睨み返ししながら、シャイニーロゴスは橋台のかげに隠れる。

鞭のような攻撃は、それでも止まずに、橋台に攻撃をつづけた。一発、二発と繰り返すが、大きな橋を支えている橋台は分厚く硬い。手数に重きを置いているいまの攻撃では、その厚さは越えられない。

「しゃらくさいことを……」

表情のないスライムが、苦虫をかみつぶしたような顔をした気がした。

「この時を！ 待ってたエル!!」

勢いよく飛び出すエルル。とっさのことに、敵は反応できない。なぜなら声が聞こえるまで、エルルの存在を認知していなかったからだ。

目の前に現れた妖精、隠れている魔法少女。なにかある。と思ったときには、エルルのバリアによって逃げられなくなっていた。

「……!? あなたたち……!」

——一体なにを……。

そう言い終える前に、シャイニーロゴスの魔法が放たれる。黄金色の魔方陣をバックにした、最大出力の一撃。襲い来る光の波。

このままだとエルルのバリアによって、シャイニーロゴスの魔法は跳ね返ってしまうはず、血迷ったか！スライムはシャイニーロゴス達の作戦の意図に気づかない。そして、その油断が足元をすくう。

光が真正面に来た時、エルルのバリアは器用にも光の通る道の分だけ消えていた。

ハメられた！スライムは攻撃を避けようと、ゲル状の体を飛び散らせるが、攻撃が来る方向以外、バリアによって塞がれている。逃げ道がない、どこへも行けない。これを狙っていたのか。すでに、光に攫われる寸前だった。最後の悪あがきと、傍にいるエルルを道連れにしようと体を伸ばす。しかし、届かない、そのままスライムの体は光の中に……。

喉からはヒューヒューと音になる。目の前の地面は、平行でなく波打って見えた。音が遠い。

「え、える……!!!」

崩れ落ちながら、相棒の妖精の名を呼ぶ。必死の呼吸で疲弊した喉では、うまくことばが発せない。かろうじて出

た音も、普段の声色とは全く違っていた。それでも、彼女は妖精の名を呼ぶ。

「……る、え、る、る——!!」

「シャイニーロゴス!!」

ふわふわの何かがシャイニーロゴスの顔面に飛びつく。嗅ぎなれたお日様の匂い。これはエルルだ。

「ごめんエル……こんな……こんなボロボロになっちゃって……でも、でも、シャイニーロゴスが無事で本当によかったエルッ!!」

心配性の妖精は、嗚咽をあげはじめる。ギリギリまで良い作戦が思い浮かばなかったこと、シャイニーロゴスにここまでチカラを使わしてしまったこと。己を責める理由はいくらでもある。大好きな相棒を、こんなになるまで戦わせてしまった。傷を負わせてしまった。どうしようどうしよう。反芻思考に囚われてしまったエルはただひたすらに、シャイニーロゴスを抱きしめる。

そんなエルルに視界を占領されながらも、よしよしと背中を撫でてあげるシャイニーロゴス。そうしている間に、彼女の体は少しずつ回復していく。このお日様の匂いとふわふわには、不思議なチカラがあるのかもしれない。だってエルルは妖精だし。そんな効用とかが、あるかもしれない。

「落ちていて……エルル……だいじょぶ、私はだいじょぶだから。この、泣き虫さんめ」

ちよっただけ皮肉めいたことを付け加えて言うと、やっとエルルは彼女から離れた。

「うっう……。いま傷を、癒す……エル……」

エルルの小さい手から、ほんのりと温かさを感じる光があふれてくる。じんわりと広がっていき、シャイニーロゴスの体を包み込む。

その温かさに身を任せ、ゆっくりと目を閉じる。

「いつも、ありがとうね。エルルがこうして治してくれるから、私は全力で敵に向かっていけるんだ」

「……。エルルは嫌エル。たとえ傷を治せても、傷ができれば痛いエル……。ほんとは」

傷を負う前に、戦いを終わらせたい。ちがう。彼女に、シャイニーロゴスに、戦いをさせたくない。守ることが、叶うなら、それが一番なのに。

光のチカラでシャイニーロゴスを癒しながら、目を伏せる。見つめる先には、シャイニーロゴスの手。エルルの傷を癒す魔力が呼び水となり、自然と彼女の魔力も通う。それを感知した手袋は、かすかに数字を浮かび上がらせていた。

そう、魔法少女には期限がある。魔法少女として変身できる回数。

残り回数『1』

今回の変身がとけたら、彼女の中から魔法少女に関する記憶が消え、もう二度と魔法少女に変身できることはない。この戦いが、シャイニーロゴスの最後の変身だった。

そのことを、まざまざと見せつけられたエルルは心がくじけそうになってしまった。分かっていた、知っていた。

だって、エルルは妖精。普通の少女『五十嵐サナ』と契約を交わし、彼女を『シャイニーロゴス』に変身させた張本人。変身の残数なんて、把握しているに決まっている。

少しずつエルルの癒しの光は縮小していく。それは、シャイニーロゴスの傷の治療が終わるいうこと。そして、彼女とエルルの別れの時が近づいていることでもある。

「うん！　すごい！　きれいさっぱり治ったよ！」

やっぱりエルルはすごいや！なんて、屈託のない笑みをうかべるシャイニーロゴス。エルルは素直に喜べない。

「最後の敵、手ごわかったね……。まー私たちの友情パワーの勝ちだったけど！」

「……………」

シャイニーロゴスは努めて明るくふるまう。それに比べてエルルは、彼女に笑いかけてあげる余裕すらない。

「……、次の魔法少女とも仲良くしてあげてね？ エルルは優しいから、きっとみんな大好きになってくれると思う」
彼女の体が光になる。

「エルルとの思い出が消えちゃうのは寂しいけど……」
ぽやぽやと小さな光の玉が浮かんでくる。

「仕方ないことだし……」

今度は足先から光が弾けはじめる。

「いままでありがとうッ！一緒にいられて楽しかった！」

光の弾けたところから、変身前の姿へと戻っていっしまう。

「まだどこかで会えるといいな」

エルルには、何一つ聞こえていない。

頭の中はシャイニーロゴスのことでもいいだった。楽しかったこと、大変だったこと、ちょっとだけ喧嘩をしたこと。彼女との思い出が、いくつも呼び起こされる。

そんな艶やかな記憶たちとは対象に、エルルをじんわりと蝕んでいるのは後悔。最後の最後まで彼女を傷つけてしまったこと。守れなかったこと。

エルルが大変な時に出会えたシャイニーロゴス、サナになにも恩返しができているのは後悔。なにか理由を付けてとける変身を止めてしまいたい。なにか、方法を。だって、恩返しに、ちがう、いっしょにまだ居たい。これからのいっしょに。そして彼女を幸せにしたい。彼女を幸せにするのは自分しかない。

いやだ。いやだいやだ。とけないで。ひとりにしないで。

「じゃ〜ん!」

視界がふさがれた。急に現れたのは、シャイニーロゴスが倒したはずのスライム。

「サナ!？」

反射的に、シャイニーロゴスの名を呼ぶ。スライムの登場に驚きはしたが、それよりも安否の確認が先だった。

「彼女はこちらになりますわ」

スライムが避けた先に、変身がとけかけてるまま、微動だにしないシャイニーロゴスが居た。

「サナになにをしたエル!!」

「彼女にはとりわけ何もしておりません。わたくし達の世界と繋がる狭間に、あなたをお呼びしただけですよ」

丁寧な意気揚々と話すスライム。その話を聞きながらも、けしてシャイニーロゴスから目を離さない。焦点はそのままに少しだけ視界を広げる。

このなんとも言えない空間、『狭間』と言われる特殊さゆえなのか、辺りには深紫のもやが立ち込めている。その向こう側にシャイニーロゴスは居た。

「わたくしちよつと頑張りました! 人間の世界の時は止めさせていただきましたわ」

スライムはむちむちと膨れ上がり、やがて妙齡の女性の姿へと変貌する。

「なので、あの子はまだ記憶が消えておりませんよ」

「!？」

「時が動き出した後も、彼女を魔法少女のままで居させられるかもしれませんが。まあそれも、あなた次第でございますが」

スライムの言葉を聞きながらも、エルはシャイニーロゴスの方へ向かう。彼女を自分の背で隠しながら、女の方へ向き直した。

「エル次第っていうのはどういことエル」

「そのままの意味ですわ。ともかく……！」

手を鳴らし、女は目を細める。

「はじめましてなんですもの、まずは自己紹介ですわね！」

両手をわざとらしく、おごそかに広げ、一礼をして続ける。

「わたくしは、カリロイと申します。あなたのような方とコミュニケーションをとるために、こうして人の形を模しております」

「……」

エルルは返事をしない。このカリロイという女の意図が何もわからない以上、用心するに越したことはない。

それを見たカリロイはわざとらしく、口元に手を持っていく。

「お返事すら頂けないなんて、わたくしとても悲しいですわ」

エルルの様子なんて気にもかけずにいる。

「ああ、そう、わたくしがなぜ無事か、という疑問が大きいと思いますので。そちらを説明いたしますわね？」

——わたくし、とても丁寧ですので！

「最後のお二人のコンピネーションには、大変驚愕いたしましたわ！ あのような一か八かの賭けに出てくるなんて……予想もしていませんでしたので……。もう、わたくしったら大慌て！ 逃げようにも逃げる先などありませんでしたので、どうしたものかと……」

先ほどから、いちいち大げさな言い方をし、身振り手振りの動作もする。

「ですが、このわたくしただのスライムではございません。ちょっと強いスライムなのですわ。なのでシャイニーロゴスさんの魔法を受ける前に、すこし細工をいたしまして……。そのおかげで、見事無事！ 元気に生存しておりますの！」

目を見開くエルル。あのシャイニーロゴスの全てをかけた魔法を、カリロイは『少しの細工』をしただけで、無傷

でやり過ぎしてしまふなんて。自分では、この敵にかなわないかもしれない。めまいがした。世界が揺れだす。視界も思考もぐらぐらの中、考えるのはシャイニーロゴスのこと。

「その後、悪戯心で負けたふりをして、あなた達の動向を見ていたのですが……。あらあら、どうしたものか——」にんまりと人の悪い笑顔を見せる。

「妖精さん、あなた『余っ程』ですわねえ？」

その言葉に、息を呑む。緊張で体がこわばる。

「シャイニーロゴスさんが、普通の女の子に戻るのが嫌なのでしょう？」

「……ッ！」

「あのまま変身がとけてしまえば……妖精さんの記憶もろとも、魔法少女に関する記憶が失われてしまう。たしかそんな契約内容ではありませんでしたか？」

「なんで……契約内容も知っているエルか……」

「情報通ですから、そのくらいは、ね？」

「たちが悪い。高い戦闘能力を持つただけではなく、こちらの情報も有している。」

「それを踏まえてご相談があります」

「またも、くらり。」

「もう一度言いますわ。時を動かした後も、彼女を魔法少女のままで居させられるかもしれません。と。どうなさいます？」

カリロイはエルの望む言葉を知っている。

気が遠くなりそうだ。

だって、この甘言を受け入れたい自分がいる。

それをなんとか否定しながら、惑わされないようにこぶしを握る。そうやって気を強く持とうとするが、あっけ

なく心に隙間は生まれる。

カリロイは、そんなエルルのことなど、すでに見透かしていた。そっと両手を伸ばし、額にキスする。

「考える時間を差し上げますわね」

エルルの体をカリロイの魔力が覆っていく。ねっとりとした高密度の魔力は、エルルをみるみる包みきった。

こんな高密度の魔力の中では呼吸ができない。エルルはもがきながら抜け出そうとする。が、酸素が、足りない。動きを奪われ、呼吸も奪われた、か弱い妖精はやがて、もがくことを諦めた。体に力が入らなくなり、だらりと身を任せる。コポコポと残り少ない酸素が漏れていく。

「――」

カリロイの声が聞こえた気がした。何を言っているかは聞き取れない。意識が持っていられる。

「変化はすこしだけ苦しみを伴うのです」

今度は、頭の中にしっかりと届いた。

エルルを包んでいた魔力が一気に無くなる。解放された。咳を繰り返しながら呼吸をした。まだ頭がはつきりしない。そのせいか体が重い。いつもの自分の体では感じない違和感。頭を振りながら、意識をはつきりさせようとする。その際、みどり色のものが視界を横切った。首元につけているリボンではない。驚いて見直し、エルルは驚愕する。

ふわふわのかわいらしいエルルの姿は、あられない姿へと変貌していた。大きな耳は消え、手足は伸び、まるでその姿は。

「人間……?」

声すらいつものとは違ってしまっている。

「そうです！ 人間ですわ！ 妖精さんの姿も可愛らしくて好みでしたが、どうせなら……と思って、人の姿に変えさせていただきましたの」

——そちらのあなたも、可愛らしいですわ。

「なにより、あなたの大好きなシャイニーロゴスさんと、同じ姿でしてよ」

その言葉に気が付かされる。シャイニーロゴスとおなじ……。

「……ただシャイニーロゴスさんと違うのは、あなたはお洋服をお召になってはいないことかしら」
「……!?」

カリロイの一言に、勢いよく体を縮こませた。一糸まとわぬ姿。なんということ。

「恥ずかしいですわねえ……ふふふ。でもそれが、たまらなくなるのですわ」

エルルの反応を楽しむカリロイ。箸が転んでもおかしい年頃、ではないはずなのに、いちいち『ふふふ』とかすかに声をあげ、含みを込めて笑うのだ。

その笑い声が鼻につく。なにかカリロイに反論せねばと、うつ向いていた顔をあげる。しかしそこには、カリロイの手が――。

ぬらついた手は、人の形からスライムのモノへ。ずるっとエルルの口元を覆う。鼻はふさがないように手心を加えて。

「むぐっ……」

「知っております？ お口の中って、気持ちがいいんですの、よ」

そのまま体を持ち上げる。エルルはスライムを引きはがそうと、両手で掴もうとするが、掴めない。指の間からすり抜けてしまう。

そんな抵抗など意に介さないカリロイは、わずかに開いたエルルの唇の間から、己をねじ込ませていく。口内を丁寧に責めあげる。前歯から、奥歯、歯茎から舌。すべてを優しく取り込んでいった。

「ふう……んッ……ん！」

心外ながら、嬌声をあげてしまう。想定より軟らかいスライム。人になりたての身で、感覚に馴染んでいない中、

押し寄せる。この得も言われぬ……。

「ゆっくりやさしくいたしましょうか？ それとも、激しいのがいい……とか？」

耳元でささやく言葉に、身じろぐ。

『どっちもイヤに決まってるでしょ!!』

声を出せない状況のせいで、エルルの反論はカリロイには届かない。頭で必死に考えるだけ。

グググ……と、と持ち上げられていた体は、とうとう地面から足が離れる。それにより全体重がカリロイの触れている首元にかかる。顎が上を向き、喉が開く。

それを待っていたと言わんばかりに、スライムは喉に流れ込んだ。

「ウ……ッ……!!？」

人体としては正しい反応。喉に異物を流し込まれたエルルは、ひどい嘔吐感に苦い顔をする。腹圧が上昇し、胃が収縮する。その苦しさは、目にはたちまち涙が溜まっていく。

「そっと入れても、やっぱり苦しくなってしまうのですわね……」

悩ましい表情をしながらカリロイは言う。

「こちらの穴は、苦しくないと思うのですが」

口元を覆っていたスライムが動きます。ずるずると移動する先は耳。耳の輪郭をなぞり、耳たぶをそっと揉みみる。くにくにと、もてあそびながら次第に耳全体を覆いつくす。

そうして、耳の穴も塞いだあとは、浸食していくだけ。

「……アア！」

異物感。それに、耳を塞がれたことによる閉塞感。聞こえるのは、耳の中で右往左往するスライムの音。溜まっていた涙が零れ落ちた。こんな屈辱的なことはない。

「あら、泣いてしまいましたの……？」

口調とは正反対な淫猥な声色でささやく。三日月のように弧を描く口元。細めた目には情欲の色が宿っている。しかし、エルルに聞こえるのは耳の中を侵すスライムの音だけ。あたまがくらくらする。

口を塞がれて、耳も塞がれた。滲む視界に映るのは、楽しげな女。

手を伸ばし、抵抗を何度も繰り返すが、カリロイはその抵抗を物ともしない。それどころか、抵抗があればあるほど彼女は潤う。潤沢にそのスライムをエルルへと滑らせていく。

次第に、エルルは分からなくなっていく。苦しいはずが苦しくなくなる。嫌なはずが嫌じゃなくなっていく。体温がどんどん上がっていく。

顔が赤らみ始める中、浮いた足がカリロイの愛撫に合わせて痙攣する。

そろりと口内を動けば反応し、耳の中で出し入れさせれば、また、反応をする。その反応に合わせて、奥からつたわる愛液。

漏れでる嬌声にも艶がのる。エルルは、快楽を覚え始めていた。

カリロイも興がのる。口と耳に這わせていたスライムを、エルルの両手に移動させると、頭の上へと持ち上げた。エルルは、やっと解放された口で呼吸をする。力なく開かれた口からは、だらしなく涎が伝った。普段なら慌てて拭うところだが、今はどうでもいい。伝う涎にすら、ぞくぞくした。

揺れる胸先の突起は、硬くツンと上を向いている。

「なんで……わたし………」

「気持ちいいんでしょうねえ？」

ふんわりと揉まれた胸にむず痒い思いをする。あえて突起には触れずに、揉みしだしていく。

「人間の体って不思議ですわね？」 最初は嫌で、苦しくて、逃げたかったのに、いまは気持ちよくて、もっとして欲しくなってる……」

鎖骨に優しくキスを落とす。軽く触れるだけ。鎖骨から首、顎下へとじょじょに上へ登らせていく。そうやって、

たくさん触れながらも、唇には触れず、垂れた涎をすすり上げた。浅ましい音がひびく。そこから器用にも舌を伸ばし、口づけはしないまま、エルルの口内に侵入する。

口内を侵される感覚といっしょに、音で頭の中を犯されていく。鼓膜で感じる振動は、耳の中をスライムで侵されていた時とは違う快感。

気が付けば、自分から舌を動かしていた。カリロイの動きに合わせるかのように、絡みつける。快感を求め伸ばした舌は、従順に悦びを享受していく。

カリロイはそのまま、絡んだ舌を自分の方へ引き寄せた。自然と舌を突き出す状態になるエルル。

「エ……ア……アア……ッ」

声を出すことに抵抗がなくなっている。引っ張られた舌を吸い上げられながら、口内に溜まった涎も音を立てながら搾取される。

ズズズズズズズズ……！

「ン、ンウ……！！」

足りなくなつて、強請るように声をあげる。体の熱さに頭が追い付かない。知らない間に、足を伝っている愛液。それはつま先にまで届いていた。

触ってほしい、もっとしてほしい。初めてなった人間の体のはずなのに、一番触れてほしいところがどこなのかを直観的に感じ取っている。

ぬるぬるになつている太ももを擦りあわせる。刺激が欲しい。自分で与えようとしても、望んだ刺激を得られない。~~~~！！ ひ、ら……さわつて……ッ！ れッ！

文字通り舌っ足らずなために、うまく言葉にならない。それでも懇願する。だって、足りない。もっと、深く熱い気持ちいいトコがあるはず。

軽く零れ落ちる程度だった涙は、いまはもう、大粒の雨となっていた。涙は、止まることを知らない。まるで大雨

に濡れた窓から世界を見ているかのように、カリロイの輪郭を捉えるのも、やっとなほど。

——こんなにも快感を強請ってくるなんて思いもしませんでしたわ！なんという貪欲さと順応性の高さでしょう。わたくしが『おまじない』を仕掛けていたとはいえ、この効きの深さは想定外でしたわ。エルさんを『余っ程』と煽りはいたしましたが、ある程度の時間を要すると考えておりましたのに。想像以上に有望な方……。それでいて、愛らしく、いじらしい……。ああもう！たまりませんわ！わたくしの方が我慢できなくなってしまいそうっ！

エルルの額にキスをした隙に紛れ、とある『おまじない』をかけていた。おまじないと言えば聞こえがいいが、実際のところ『呪い』のようなものである。不用心にも『闇』の前で見せた心の隙間。その隙間を縫って、心の奥へと入り込み、エルルの罪悪感や後悔、そして小さな妖精が抱えるには大きすぎた魔法少女への思い。それら全てを『闇』側である自分たちに都合のいいように変えてしまう強い『呪い』

おかげで、エルルの中の罪悪感や後悔の感情は、享楽へと置換され、残ったシャイニーロゴスへの思いは膨れ上がり、より一層エルルの中で大きなものとなった。

『呪い』に順応したことによる感度の上昇。快楽への追及。

「いい反応ですわ！ エルルさん……きもちいいことって素敵でしょう」

エルルの熱い吐息につられ、知らぬ間に息が上がっていくカリロイ。

音を立てて涎をすすり、名残惜しそうに舌を離す。エルルの顔から目線を落とし、ふっくらとした胸を見つめる。胸先の突起は、腫れぼったく主張していた。

「お胸もいい感じに、反応なされますわね。どうして上げたらいいかしら……」

あからさまな様子で、悩んでいるふりをする。どうするかなんて、考えるまでもない。舌先で突起に触れる。とたんに甲高い声が上がった。

「アアッ！ すきっ！ その気持ちいいの！ すきイ!!」

何かを堪えるように、目をつむりながら、次をせがむ。いままでの、少しぼやっとした優しい快感とは明確に違っていった。直接的で強い快感。そのせいで、神経が昂る。昂って、溢れた熱は、待ち構えていたカリロイによってなぶられてしまう。

ちろちろと動いていた舌が、細く糸のように伸びると、胸の突起に巻きつきだす。そうして、突起を強く締め上げた。

「……ツツツ!!!!」

突然のことに声もあがらない。予想もしない、性急な攻めから与えられる気持ちよさ。つい下唇を噛んでしまった。下を向くと、微笑むカリロイと目が合う。今度は視線で訴える。もっとしてほしい。

その切実な視線に答えるように、逆の胸の突起もいじめはじめる。指先でつまみつつ、ねじり、軽い痛みを与える。やさしくなどはしない。血流が増加した先っぽは真っ赤に、可愛らしく腫れている。

この劣情をもっと赤く彩って、それをいじってなぶって締め上げて。

「おかしイのオ！　こんな、されてツ……イタイのにツ！　きもち……イイ!!」

チカチカする。気持ちよさに脳が反応して、視界に光が瞬く。視神経すら過敏になっているのか。その光の先に何か見えそうな気がした。気持ちよさがいっぱい詰まったエルルの行きつく先が……。

光を追って眼球が上を向く。必然的に目が見開いていく。

「勝手にいきそうになるなんて許しませんわ」

その果てを見ることを、カリロイの支配欲が許さない。間髪入れずに、愛撫を止める。痛いほどに感じていた快感が、途切れる。

目の前で、快楽を取り上げられてしまったエルル。果てを感じたのに……。快楽が欲しい。また、果てを見たい。浅い呼吸を繰り返しながら、気持ちよさの事ばかり考えている。そうだ、強請れば、くれるかもしれない。

もう、そんな浅はかな考しか浮かばない。足をバタつかせ意思表示をする。

「お願いしますッ……。やめないで、もっと、が、イイ！　たくさんっなれそう、だったのッ！　きもちいいがっ！　いっぱいっいっぱいっ！　だから、もっと下の、あついットコッもッ触って……ッ!!」

「……先ほどから、涎を垂らして、強請ってばかり。こんなみっともない姿、あなたのだーいすきなシャイニーロゴスさんが見たら、なんておっしやりますかしら……」

「言わッないでッ……!」

かすかに残った理性が、否定する。だめ、見られたくない。こんな獣のように涎を垂らし、ただただ、快楽をむさぼる自分を……見られたく、ない。ない、はずなのだが、その思いに『もや』がかかりはじめていた。

「見、れら……嫌？　い……イイ？　それも、気持ちいい？　なる……？　え、ダメ……じゃない……?」

「ふふ……あはははッ！　本当に！　はしたないですわ!!　先ほどの！　勇ましく戦っていたあなたはどこへ行きましたの？」

エルルはもうよく、わかっていなかった。軽蔑されていることも、理解できていない。だって、頭の中は快感への渴望でいっぱい。

——そんなよくわからないことを言っていないで、早く気持ちよくして！

「なんでもイイから……!　いっぱいして！　たくさん!!　ください!!」

薄ら笑いを浮かべたカリロイは、エルルの体制を変えはじめた。持ち上げていた両手はそのまま、自分の体からさらにスライムを伸ばし、腰を持ち上げ、お尻を突き出させる。

この体制にすると、実に、よく、見える。ぐずぐずになってるソコが。熟れながらも、触れてもらえない秘部。ザクロのように甘酸っぱい香りが、鼻腔に広がる。足の付け根から引いた糸が、誘惑してくる。

「ここ、ですわね？　わたくしに触っていただきたいトコは……。まあ……こんなにも赤くなってしまっ……可哀そうに」

やっと触ってもらえる。エルルは期待に沸き立った。

しかし、やってきたのは鋭く強い痛み。

バチンッ！と鳴り響く音。あれほど熱かった汗が急激に冷え、一気に体温が下がった。

「——がっ!？」

理解が追い付かないまま、また痛みが走る。

バチンッ！バチンッ！

何度も繰り返されてからやっと気が付く。お尻を叩かれてることに。

想像もしてなかった。弾ける痛みを目をつぶる。

「これはッ！ 本当に痛いでしょう!？」

カリロイの手はためらいなく、エルルのお尻を叩き続ける。

バチンッ！バチンッ！

「わたくしの許可を得ないで、イこうとした罰ですわ」

バチンッ！バチンッ！バチンッ！

「ごめ……なさっ……い！ もっ、勝手にイこ……と、しませんっ！」

小さくしゃくりをあげながら、謝罪をはじめる。反射的な謝罪だった。カリロイが怒っている理由は、勝手にイこうとしたこと。だと、いうが、イくということが明確には分からない。でもきつと、イくというのはあの光の果てに行っちゃうことなんだろう。それを味わいたいのなら、カリロイに許可を取らなくてはいけない。いいよ。って言わないと、導いてもらえない。

動きの鈍い頭で考える。きつと、こういうこと。カリロイの意志に背くと、快感は取り上げられてしまうし、強い傷みが自分を襲う。

この短時間で、エルルはそれを学習してしまった。エルルを支配下に置くための飴と鞭。まんまと嵌められてしまう。

「ほんとうに？　ちゃんと理解しまして？」

「はい……！わたし、言う、こと、ちゃんと、聞きま、す……」

エルルは反射的に、隷属することを誓ってしまった。はたと、平手打ちが止む。

「わたくしのお約束、守れます？」

——守れるのでしたら、気持ちいいことをしてあげられますわよ？

念押しでもう一度訪ねる。考えることを放棄しているエルルの頭では、理解も判断も難しい。残っている思考は快楽のこと。欲してしまう。あっけなく。

「約束しま、す！　しますから……！」

「いい子……。ちゃんとお約束を守れるのでしたら、怒ったりはしませんわ」

カリロイは思わず、表情を和らげる。自分の言いなりになるエルルを見るのは、気分がよい。そんな風に見られているなんて露知らず、エルルは大きく安堵していた。

お尻は熱くピリピリと痛む。平手打ちの弾ける痛みとは違う、残響のような痛み。さらに、はっきりと手形が残り、真っ赤になってしまっていた。

そのお尻を優しく撫でるカリロイ。まるで、小さい子をあやすかのようなでもある。カリロイの人間より低い体温が、エルルには心地よかった。少しだけ冷やされたお尻。ピリピリという神経が騒ぎ立てる痛さから、ジンジンとにじみ出てくるような痛みが変わる。痛みが和らいでいる、ような気がする。

ゆっくりと撫でる手つきを、優しいものからやらしいものへと変えていくカリロイ。わずかに与えられた性的快感。少しずつ揺れはじめ、真っ赤なお尻。過敏になった神経は、そのわずかなモノも見逃さない。

「あッ……あッ……アッ……！」

にじみ出てくるような痛みが、穏やかに快楽へと変化する。声色も色めく。従順な反応を見せるエルル。カリロイの撫で上げる手は、膨らみ始め、お尻を包み込む。冷たい体温が、もっと良く感じられる。

「また、気持ちよくなってますの？」

「あひ……。なっちゃいましたあ……ッ！」

今度こそ、きちんとイってみたい。さっきの光の続き、カリロイが言っていたイクということ。

ひたすらにその高みへ手を伸ばす。体中を性感帯だと思いつく。脳とは不思議なもので、思い込むだけでも体で作
用してしまう。研ぎ澄まされた各神経は、快感のみをただ貪り食う。そうすることで、また果てに近づいていく。
しかし、勝手にはイケない。イきたい時は、許可を取らなくちゃいけない。教えてもらった通りに、きちんと。そ
うしたら、今度こそ気持ちよさの先に、イけるかもしれない。

「……ッ……！ お尻も気持ちいいです……！ 気持ちいいのしてくれて、ありがとうございます……！」

カリロイの機嫌を損ねないように、丁寧に。顔色をうかがいながら。

「わたしっわたし、また、いきそうで……！ お願いま……す！ 今度こそ、イかせて……ほしい、ですッ!!」

また、チカチカと視界がちらついてくる。もう、気持ちよさが溢れていきそう。

「ちゃあんと、おねだりができましたわねえ」

エルルはまた眼球が上を向き、果てに近づいていく。そのままいきそうになるのを、なんとか堪え、カリロイに
うったえる。

イクのを耐えている姿とは、いじらしいものがある。そんな健気なエルルにはご褒美をあげなくては。

カリロイは体のありとあらゆるところから、スライムを伸ばし、エルルの胸と口を愛撫した。触れられた胸も、口
も、先ほどの気持ちよさを覚えている。触れられるだけで、その気持ちよさを思い出し、期待に濡れてしまう。

そんなにいっぱい弄られたら、もう。

「アアッ!! イ、イグッッ!! イっちゃッ!! しゅごッアッダメッ……!!」

ひととき大きな声をあげたエルルは、体を痙攣させ、あられもなく絶頂した。

視界は白に染まり、目の焦点がずれ、虚ろに宙を見つめている。だらしなく開いた口からは、涎が垂れていた。

ぴんと伸びた足先は、軽く痙攣をしている。

「はじめてなのに……とろとろメス汁いっぱい出ちゃいましたねえ……」

濡れそぼった秘部を見つめ、満足げに言う。どろどろになっているソコ。

わざと触れずに、カリロイはエルルをイかせた。きつと彼女はこちら側に来る。そのエルルが、シャイニーロゴスを手放すはずがない。すると必然的に、シャイニーロゴスも引きずり込むことができる。そうして二人を手に入れたから、ソコに触れるのが一番だと考えていた。だから、その時まで、おあずけ。

「気持ちがいいと幸せを感じますでしょうか？ これから先も気持ちよくて、幸せに、なりたくありませんか？」

快楽の余韻を味わうエルルに言う。魅惑のひと声。

「シャイニーロゴスさんと一緒に、幸せになりませんか？」

カリロイの言葉に過去の記憶が呼び起こされていく。

エルルはサナと契約をする前に、何人かの少女と契約を交わしていたことがあった。

妖精の『闇』を浄化したいという一途な思いを、打ち明けられた少女たちは、面白半分で魔法少女になる。しかし、

『闇』と戦いを繰り返すうちに、少女たちは妖精をひどく罵り始めた。

「こんな目に遭うとは思わなかった」

「早くこんな記憶忘れて日常に戻りたい」

「あなたの顔なんかもう見たく無い」

「私たちがばかり戦わせて」

ひとしきり罵倒すると「魔法少女を辞めたい」と捨て台詞を吐く。

たびたび繰り返される非難の声に、妖精はどんどん精神を病んでいった。彼女たちを危険にさらす自分が悪い。どうしようもない自責の念が、妖精を蝕んでいく。

そんな中出会った少女が、サナだった。

彼女は、今までの魔法少女たちとは違い、妖精を責めたてることをしない。驚いた妖精は一度聞いたことがある。魔法少女になって後悔はないのかと。

とぼけた表情をして少女は言う。

「だって、私が望んだことだし……。それに、独りで戦ってるわけじゃないから！」

——エルルが居てくれるから、私は戦えるよ。

はじめて、言われた。自分を仲間として扱ってくれて、一緒に戦いたいだなんて。少女のひたむきな明るさに、妖精は救われた。

この少女のために、自分は頑張ろうと。自責の念が消えることは無くても、そればかりに囚われることは無くなっていた。

そして、妖精は願う。この少女に辛多からんことを。

だけど、でも。心に潜むのは黒い感情。魔法少女になることの回数制限への危惧。それを使い切ってしまう、少女は妖精の事などあっけなく忘れてしまう。

妖精が願う幸せや、恩返しをしたいという気持ちばかりが残ることになる。

二人で幸せになりたい。サナと一緒に、幸せになりたい。幸せに？それだけじゃない。ほんとうは、気持ちよく、なりたい。

——カリロイかけた『呪い』がまた形を現す。

エルルの中のサナへの思いが以前と違ったものへと変化する。幸せになりたい、恩返しをしたいという無垢な思いが『二人で気持ちよくなりたい』という思いへと置き換わっていく。

サナと一緒に、気持ちよく幸せに。

「幸せになるなんて簡単なことですわ。でも、お一人になるより、お二人で幸せになる方が、いいですわよね？　その方がお二人とも気持ちよくなれますものね？」

ぼんやりと頷く。それがいい。それでいい。『闇』の浄化なんて、もう、どうでもいいや。

エルルはカリロイの望むままに堕ちる。サナの傍に居られないのは嫌。サナが傷つくのは嫌。

「いいことを思いつきましたわ！　たしか、エルルさんはシャイニーロゴスさんにだけ戦わせるのが嫌なのでしたよね？　それなら、お二人で戦うのはどうでしょう？」

「ふたり、で？　戦う……」

「そう、お二人で……、魔法少女になればいいのですわ」

そんなこと、考えもしなかった。カリロイからの夢のような提案を断るほど、エルルは、正しい判断が、もう、できない。

「それが、いいなあ……。サナと一緒に戦って……。私がサナを守るの……」

「では、決まりですわね」

カリロイは己の胸の中に手を入れ、深い緑色の宝石を取り出す。エルルの髪色であるボトルグリーンに、近い色をしていた。体内の高魔力で精製された特別製の宝石。その宝石に少し手を加え、エルルの首に似合うようにチョーカーに仕立てる。

「このマラカイトが、あなたを魔法少女に変えてくれますわ」

優しくエルルの首に着けてあげると、両手の拘束も解き、一歩下がる。

宝石から帯状に深紫が広がり、エルルの体に巻き付く。魔力による作用で、みるみると彼女の姿が変わっていった。一糸まとわぬ姿だったはずが、気が付けば、シャイニーロゴスに似た魔法少女の服を身にまとっている。各所のレースがひらひらとして、愛らしい。

「これが、魔法少女……」

「こだわったのは見た目ばかりではありません。妖精さんと契約をされた魔法少女たちよりも、強力なチカラが備わっておりますわ」

たしかに。いままで感じたことのないほど、魔力が体に満ち満ちている。こぶしを握り、広げる。それを何度か繰り返し、魔力を体に適応させていく。

笑みがこぼれてしまふ。これなら、もうサナを危険な目には合わせることはない。いままで感じたことのないほどの自負心。

「ふっ……ははは！ なにこれ！ すごーい！ もう、怖いものなんてないかも！」

与えられたものに酔いしれる。その姿は新しいおもちゃを与えられた子供のようだ。

「見事ですわ。これほどまでに立派に『魔法少女』になっていただけるなんて」
顔を輝かせながらエルルはカリロイに飛びつく。

「ね！ 早くサナのところに行こう!? わたし早くサナにもプレゼントしたい！」

「まあ……ふふ……。そうですねえ」

——ただ、その前に。

「あなたはもう、妖精さんじゃありませんわ。『エルル』さんというお名前も折角ですし、変えてしましましょう？」

「なまえ？ そんなのなんだっていいんだけど……。あーでも、サナに呼んでもらうためには考えなくちゃ……」

うーん。と頭をかしげながら考えはじめ。が、一向に思いつかない様子。

見かねたカリロイは、軽く笑いながら申し出る。

「わたくしから、提案させていただいてもよろしいかしら？」

頭をかしげたまふ。カリロイを見つめた。その行動ゆえか、あどけなさが見て取れる。

「『パトス』さん。なんてどうでしょう？ さらにそこに『クレヴォ』を足せば、さらに魔法少女味を帯びると思う

のですが」

「ぼと、す……？　ぼとす、パトス。クレヴォパトス……。えへへ……ちょっと気恥ずかしいね。でも、しつくりくるかも……」

「ほんとうですか？　では、あなたは今日から『クレヴォパトス』さん、ですわね」

ネガティブな感情に囚われていた妖精のエルルはもう居ない。ここに居るのは、サナと幸せになりたい、情念のかたまりのクレヴォパトス。

「改めまして、パトスさん。これからよろしくお願いしますわね」

「うん、カリロイ、私の方こそよろしくね！」

初めて呼ばれた自分たちの名に、お互いに笑い合う。名前を呼び合うということは認め合ったということ。エルル……いやパトスはカリロイのことを信頼するようになっていた。

「さてさて、シャイニーロゴスさんのところに向かわなくては」

カリロイのチカラにより、時を止められた人間世界。

そこに黒い裂け目が現れ、ゆっくりとカリロイ、そしてクレヴォパトスが現れた。

まだ時は動いていない。

「いまから時を動かしますわ。そうすれば簡単にシャイニーロゴスさんの変身が解けてしまいます。そうなれば、さすがのわたくしでも、記憶を戻すことが叶わないかもしれません。なので、変身が解ける前に彼女をこちら側に引き入れる必要がありますわ」

パトスは苦い顔をしながら、シャイニーロゴスを見つめる。足元の変身は解けている。それが全身に広がり、髪先まで解けきってしまったらおしまい。記憶が消えてしまう。

それを回避するために、これから事を起こす。

魔法少女を『闇』のチカラから守るのは、胸飾りの宝石。そのチカラのおかげで、魔法少女が『闇』のチカラに蝕まれることはない。ただ、その宝石にも弱点があった。それは、内側からの攻撃等に対応していないこと。外からの攻撃にしかそのチカラを発揮できないということ。

もちろんパトスは、その抜け穴を知っている。なので、シャイニーロゴスを『闇』に引き込む役目は彼女に任せられた。

「ささやかな抵抗として、変身が解けるスピードをゆるやかにしてみせます。その間に……できまして？」

「もちろん。だいじょうぶ」

——では、3, 2, 1……

カリロイのカウントダウンに合わせて、パトスはシャイニーロゴスに近づいた。

——0

「ばいば……」

別れの言葉が途中で止まる。目の前にいた涙目の妖精はおらず、居るのは見知らぬ顔の少女。

「え……っ」

言葉の続が出ない。

「見て……？ サナとおんなじ魔法少女になったの……もうひ弱な妖精なんかじゃないんだよ」

「よう、せ……？ うそ……もしかして、そんな、エルル……？」

気が付いてもらえたことへの嬉しさに、笑みがこぼれる。

「名前もね？ 変わったんだよ？ 私はパトス、クレヴォパトス。あなたを守るために、魔法少女になったの！
もうこれで、辛い思いはさせないから……」

間髪を容れずパトスは、シャイニーロゴスにキスをする。カリロイにされたように、口をこじ開け舌をねじ込む。
「んう……ッ！」

パトスのせつかちとも言える動きに、シャイニーロゴスは呼吸もままならない。どうにかして鼻で息を続ける。それでも足りなくて、唇に隙間が開くたび、二人の息が混じる。

絡まる舌。唾液。パトスから流れ込む『闇』の魔力。

「ハア……ハア……ッ！　ね、サナア……。これ気持ちいいでしょ？　パトスね。教えてもらったの。それを、今度はパトスがサナに教えてあげる」

シャイニーロゴスへのキスが引き金となって、体の奥に残っていた熱がまたこみ上げ始める。

その熱に身を任せ、はじめてながらも胸を揉み始める。相手を気持ちよくさせるといふより、ただ胸の軟らかさを確かめているような揉み方。

足の間がむずむずしてくる。腰を揺らしながら、シャイニーロゴスの足の間に自分を滑り込ませる。膝で、彼女の下着の上をなぞった。

「……ふッ!？」

されたことないことをされ、触れたことのない場所を触れられ、シャイニーロゴスはうろたえる。

自分の知ってるエルルならこんなこと、しない。どうして。なんで。疑問を投げかけたいが、口はふさがれている。頭の中で考えても答えなんか出ない。その代わりなのか『きもちいい』という思いが頭の中を支配していく。

その思考の偏りは『闇』のチカラがシャイニーロゴスの中に浸透している証。

「もッもつと……ねえ……サナ……ア」

むしゃぶりつくような下手なキス。パトスは無我夢中で、シャイニーロゴスにしがみつく。

胸を揉んでいた手が、期せずして胸元の宝石に触れる。

——ああ、これ、邪魔だなあ……。

爪でカリカリと引っ掻きながら思う。この堂々たるさまはまるで己が、シャイニーロゴスを守っていると言っているようで憎らしい。

パトスは注ぐ魔力量を増やした。すると、じんわりと宝石の色が濁る。

濁りはやがて宝石全体に広がり、透明感は消え失せ穢れおちた。ここまで浸食させてれば、あとは簡単だ。パトスは、宝石を握り力を込める。

宝石が灰に変わり、宙に舞う。宝石として砕け落ちることもできないほどの腐敗。

シャイニーロゴスの理性を繋ぎ止めていた糸が、切れてしまった。あとはもう堕ちるのみ。

彼女の足元、変身が解けていた部分から『闇』は広がる。少しずつせり上がり、魔法少女の変身のことごとく変えていく。

「パトスさん！ メッ！ 待て！」

いつの間にか、パトスの後ろに立っていたカリロイ。パトスの両脇に手を入れて抱きかかえる。長身のカリロイに持ち上げられたパトスは、地面から足が浮く。

「えー!! なんでー!!」

「なんでじゃありませんわ。シャイニーロゴスさんをご覧になって？」

そう言われ、シャイニーロゴスの方へ視線をもどす。少しずつ見た目が変化していることに、指摘されてから気が付いた。

「……む、夢中になりすぎてた……………」

「こうなってしまうば、もう彼女もこちら側ですので、そう焦ることはありませんわよ」

状況に納得のいったパトスを離す。その間にもシャイニーロゴスの変化は進む。足から、腰、胸、そして頭と変貌していく。

明るく清楚な印象を持つ装飾が多かった服は、濃艶で大人っぽいものへと変わっていた。全身を『闇』のチカラで変貌させても、シャイニーロゴスは、ぐったりと横になったままだである。

おそらくまだ、魔力になじみきれていないのだろう。

パトスは駆け寄って、そっと抱き起す。顔を覗き込む、顔色は悪くない。少しだけ安心した。

「サナ……？」

「……、パト、ス……？」

「さっきはごめんね……急にあんなことして」

「うんうん、平気、だよ……」

「上手にはできなかったけど、気持ちよかった？」

「……うん。気持ちよかった……わたし、はじめてで……」

「やったあ！ 今度は、もっともーっといろいろしようね？ それで、二人で気持ちよくなろうね？」

「二人、で……。そっか……。もうパトスと、ずっと、一緒に居られるんだね？」

「そう、そう！ これからずっと二人一緒なんだよ」

あまりの嬉しさに存在しないしっぽを振り回すパトス。カリロイから見れば、大きく揺らす耳も見えそうだった。

『闇』のチカラに浸食され、パトスと共に居ることを望んだ彼女はもう『シャイニーロゴス』では無くなってしまった。

少女は『クレヴォロゴス』

『クレヴォパトス』と対をなす、『闇』の魔法少女。

宝石があったはずの胸元は、物寂しくがらんとしている。パトスはその指で撫でながら言った。

「もうちょっとかわいくしょっか」

パトスは自分の宝石を握る。そしてゆっくりと広げれば、そこには同じ形の宝石がもうひとつ現れた。

暗みがかった赤色の、ザクロのような宝石。

「これからは、この宝石がサナを守ってくれるんだよ」

ふうっと宝石に吐息をかければ、かわいらしいチョーカーへと変わる。

それをサナの首につけ、パトスは抱きしめる。堕ちるまでひた隠しにしてきた、独占欲が満たされていく。

「この宝石、ガーネットって言うんだよ。サナにとっても似合ってる」

「ありがと。パトスがくれた宝石、大切にする」

「えー！パトスのことも大事にしてね？」

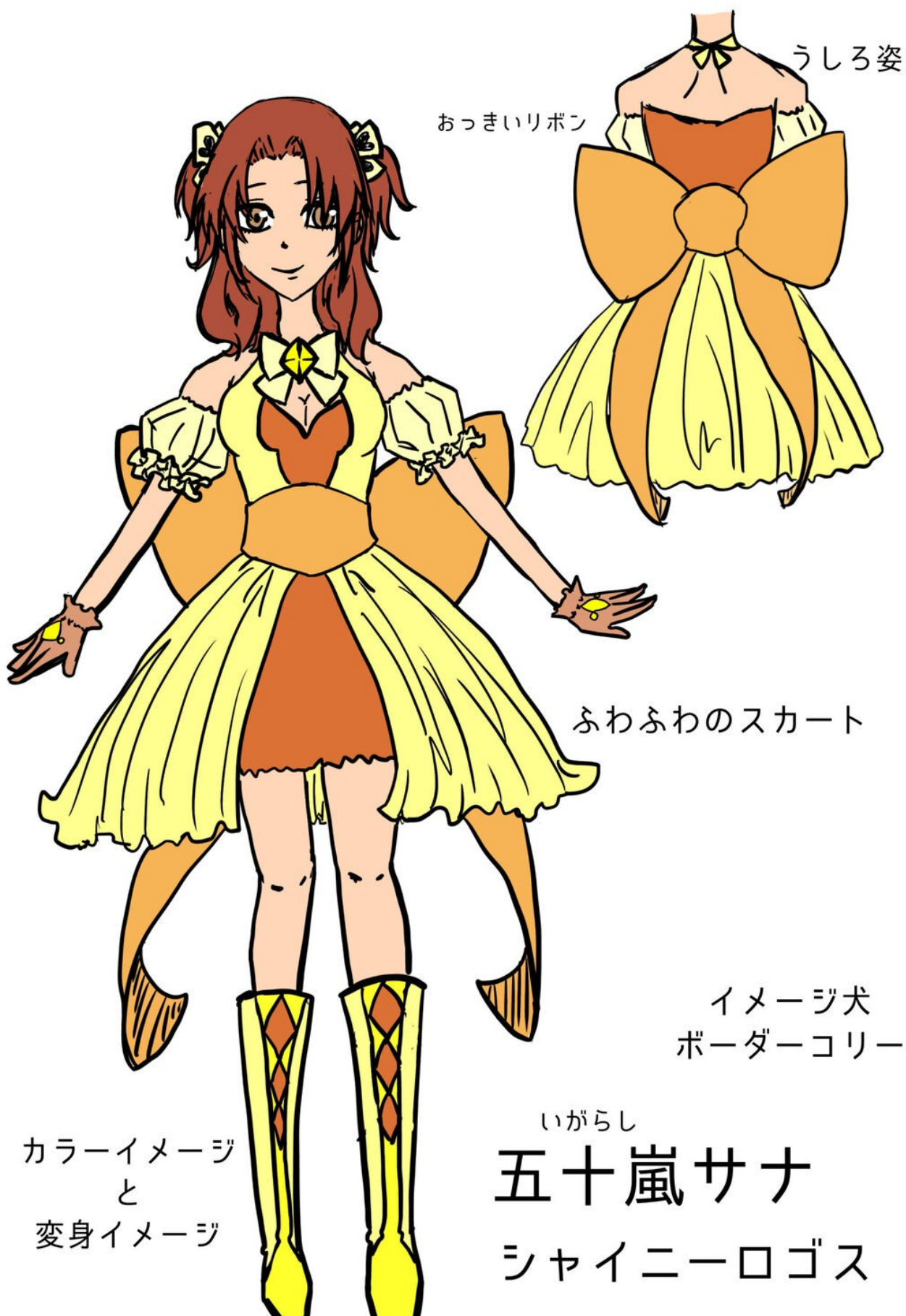
「当たり前でしょー！」

一緒になって笑う。目と目が合う。サナの目の色は『闇』のチカラの影響なのか、薄茶から黒色に変わっていた。

目敏くそれに気が付くパトス。パトスの目の色も、同じ黒色だ。そんなお揃いにすら、胸は高鳴る。

「目の色もおんなじになったね。綺麗だよサナ」

そういうと、べろんと目玉を舐めあげた。目を覆っていたサナの涙は、少しだけ甘いような感じがする。舌なめずりをして、黒色の目を見つめる。揺れるまつ毛につられて、今度は頬にキスを落とした。



うしろ姿

おっきいリボン

ふわふわのスカート

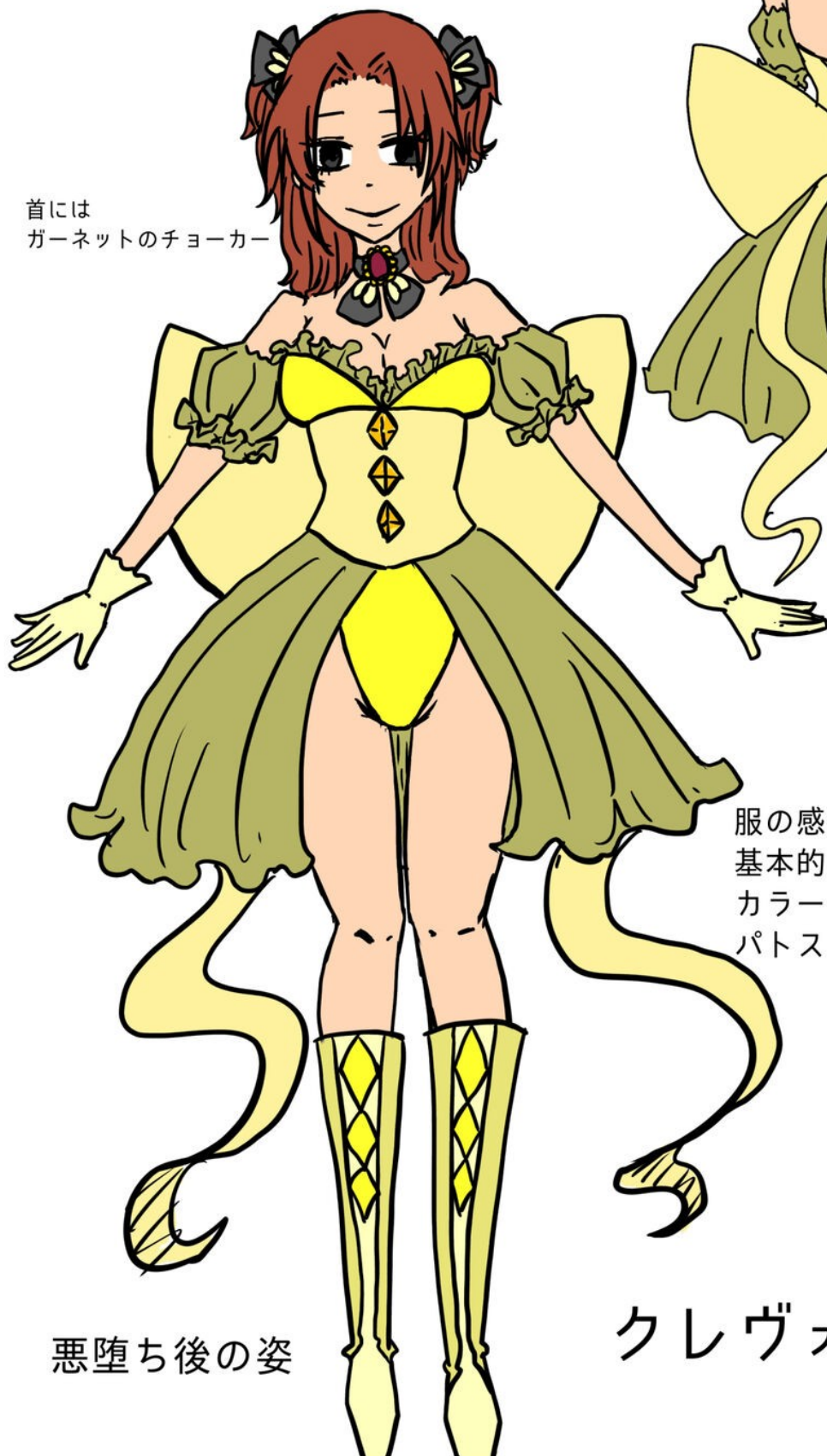
イメージ犬
ボーダーカラー

カラーイメージ
と
変身イメージ

いがらし

五十嵐サナ

シャイニーロゴス



うしろ姿

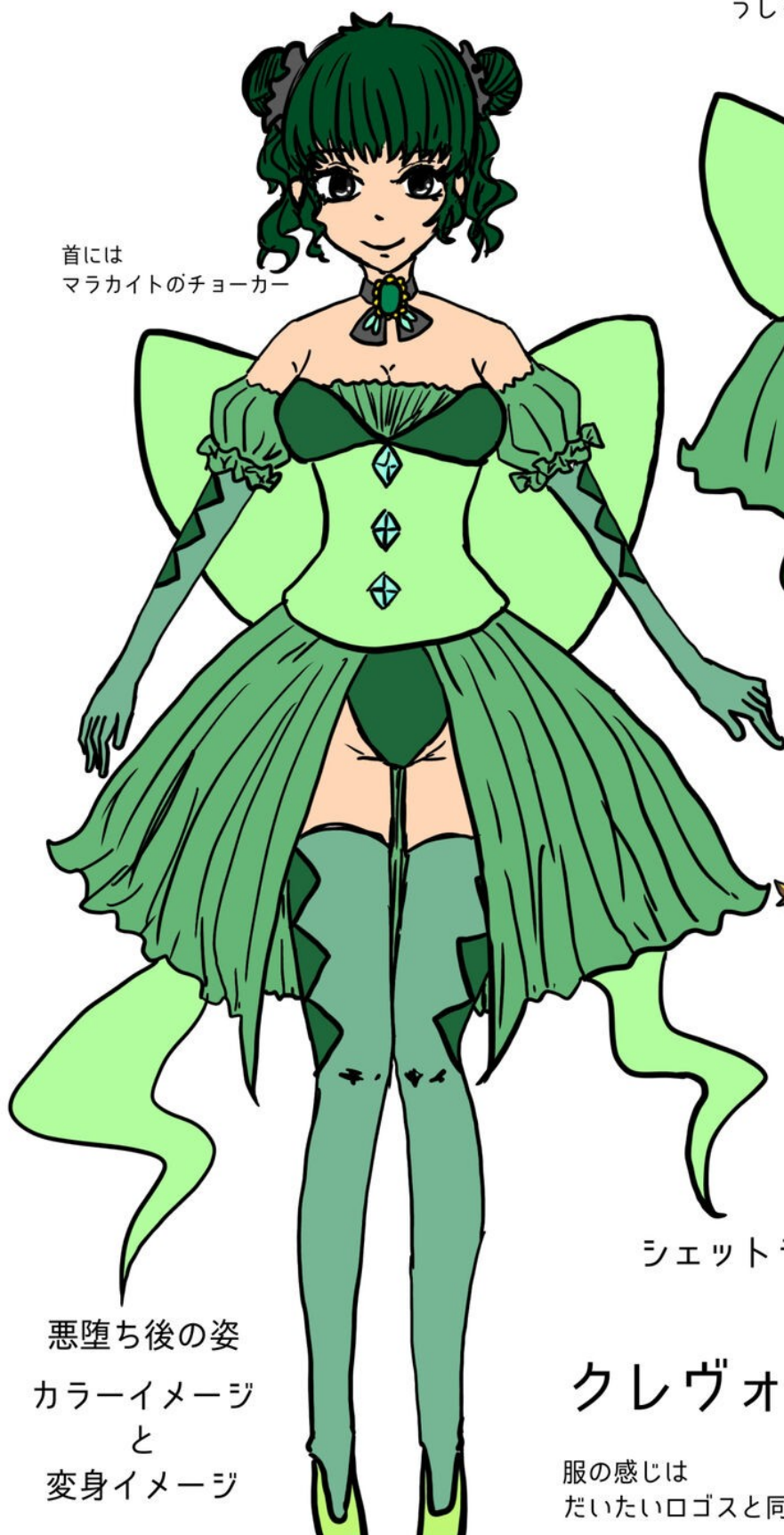


服の感じは
基本的に魔法少女時と同じ
カラーリングは
パトスに寄る

悪堕ち後の姿

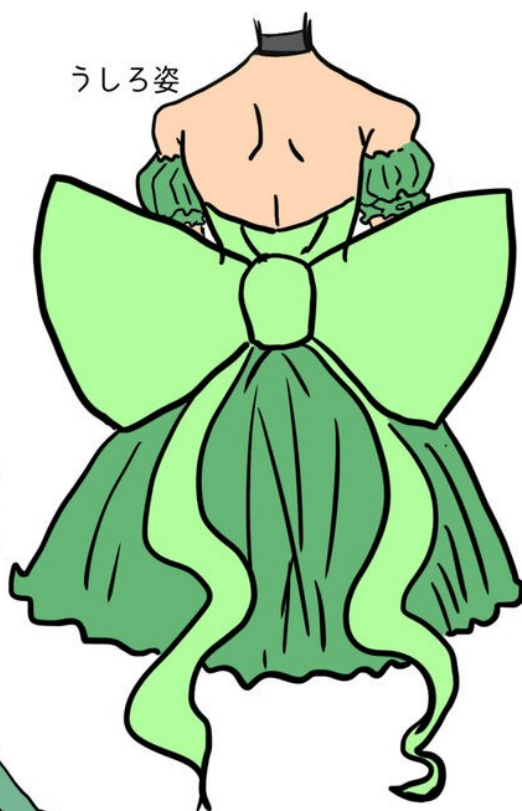
クレヴォロゴス

首には
マラカイトのチョーカー



悪堕ち後の姿
カラーイメージ
と
変身イメージ

うしろ姿



エルルの時



イメージ犬
シェットランド・シープドッグ

クレヴォ・パトス

服の感じは
だいたいロゴスと同じ

『闇』の組織の幹部

カリロイ

人間や妖精と対話し
取り込むために偉い人に作られた



人間時

スライム時



ゲストコメント

ありがたいことにまたもや、凜さんからお誘いいただき、
素敵な世界観で書かせていただきました。

すごく楽しかった。いいね…こういう制限のある中、あがく女の子は、可愛い。
そんな可愛い子たちが苦悩してえっちな目に合うのは、さらに可愛いですよ～！

魔法少女ッということで、調子に乗って設定画も描いてみました。
簡単な配色と、服のイメージくらいしか形にできませんでしたが…！

良ければ小説を読んだ後に、設定画を見ていただき、
さらにまた小説を読んでいただけたらなー！なんて強欲発揮します。

強欲発揮したままお礼も言わせてください。
読んでいただきありがとうございます。

そして、またお誘いしてくださった凜さん！ほんとうにありがとうございます。
見て頂けた通り楽しすぎて、なんか長くなってしまったし、
設定画にも手をだしてるし…。

懲りずにまた、絞ってほしい…。ギュギュツ…

改めまして、読んでいただき本当にありがとうございました！

久慈らんちう
X @xmeushi2
Skeb <https://skeb.jp/@xmeushi2>

あ と が き

最後までお付き合いいただきありがとうございました。北川です。
…らんちうさんの方が本編だったかも…たぶんそうです。

えっちだったね……………。

制作中にもらんちうさんから設定について色々確認いただいていたんですが、
こんなにしっかり設定を使ってもらえるとものすごく嬉しいです…!!

私が作品出し終わったら設定記憶喪失になる人間なばかりに
確認いただくたび「たぶんそうです!」「そうになっていいです!」みたいな
ふわふわの返答しか出せてなくて本当申し訳なかったなと思います。

しっかり調理してくださったらんちうさんに感謝…!

そして前作の登場人物に触手生やして遊んでたような私にお付き合いいただき、
ここまで読んでいただいた方にも改めて感謝を。

本当にありがとうございました!

奥付

『変身回数に限りがある世界の魔法少女が悪の手を取り堕ちた先。』

発行日 2024年06月23日

発行 夢見町3丁目./北川凜(ktkw3.r@gmail.com)

webサイト <https://d-town3.com/>

X @Rin_kitakawa

※無断での転載・複製を禁じます。